

日韓歴史共同研究委員会

第1分科会座談会(2009. 8. 19於襄陽)

発言者	内容
金泰植	<p>ただ今より第1分科会第16次合同分科会議を始めたいと思います。</p> <p>座談会に入る前に、我々〔第1分科会〕は三つのテーマからなっていますが、本日の日程としましては、一つのテーマを通訳の時間を含めまして1時間半から2時間くらいで終わらせるようにしたいと思います。私の考えでは、午前中に第1テーマ、3世紀以前についてを終わらせ、第2テーマの半分くらいまでを終わらせてから昼食を取りまして、その後第2テーマの残り第3テーマを取り扱い、それから少し時間を取って、今回の第2期委員会の第1分科会についての反省と展望について少し話し合ってみようと思います。</p> <p>それから、次の会議は編集会議ということになるでしょうが、原稿の締め切りが9月末日までとなっておりますので、原稿の作成についてももう少し議論の余地があるように思います。したがって、最終報告書作成に関して、〔会議〕終了前にもう少しだけ議論する形で本日の会議を進めていきたいと思います。</p> <p>ただ今より第2期第1分科会座談会を始めます。</p>

古代日韓関係の成立

濱田耕策	<p>さきほど、先生から座談会の方針が出されましたが、第1分科会のそれぞれのテーマについて1時間半から2時間ほどという話でしたね。座談会のテープおこし、今後の編集作業がスムーズに行くように、立派な発言を我々としても努めたいと思います。</p>
金泰植	<p>第1期の時からの原則なのですが、座談会の記録はあとで修正できませんので、話の筋を整理された上でお話しいただければと思います。</p> <p>それでは座談会を始めます。まず我々の座談会の原則は、各テーマ別に韓日両国から約10分間の基調報告、問題提起と申しましょうか〔これ〕を発表いたしまして、残りの方々は〔発表が〕終わってからそれについて一緒に議論するという形で進めていきます。</p> <p>最初のテーマは古代韓日ないし日韓関係の成立です。</p> <p>韓国でやっているということもありますし、やはりお客さんからということで、まずは濱</p>

	田先生からなさってはいかがですか。
濱田耕策	趙法鍾先生が十分準備をされておりますので、趙法鍾先生からお願いしたいと思 います。
金泰植	お客様ですから、濱田先生からどうぞ。
濱田耕策	<p>そうですか。お客さんが最初でしたか。</p> <p>美味しいものを食べるのはお客さんからだと思っていましたが、最初に苦いものを味 わうのがこの会ですか。それは冗談として…。</p> <p>私は、「古代日韓関係の成立—地域間交流から古代国家の関係へ」という副題で 研究の整理に取り組んでまいりました。</p> <p>私の報告文の目次でおわかりのように、「考古学の成果から見た半島・海峡・列島の 地域間交流」ということを第1章で取り上げております。私は考古学者ではありません が、このテーマの下で主として、考古学者たちの論文・文章を読んでまいりました。私の この部分の文章というのは、専門家の考古学者から見るといろいろと批判あるいは不足 の指摘が大いにあると思います。</p> <p>今回の共同研究で、テーマを広く、長く、我々は設定いたしました。その意欲は評 価すべきではありませんが、私にとっては大変な課題でありましたが、私にとって得るもの はありました。今後の私の研究、あるいは関心のテーマに新しいものを獲得することが できました。</p> <p>そこで、私は最も疑問に思ったことは、この日韓関係史という今日的な見方から考 える時に、どこまで遡っていけるだろうか。日韓関係史というこの問題の設定は、どの時代 から始まるのであろうかという、いわば私にとって基本的な問題意識です。副題に「地 域間交流から古代国家の関係へ」と掲げて「地域と交流」、「国家と関係」という視点で 理解しようとしています。</p> <p>今日の日本に連なる国家の起源を考える時に、あるいは日本の文化の形成を考 える時に、朝鮮半島地域、韓半島地域との交流は非常に必須なことです。このことを韓国 史に置き換えますと、今日の韓国に連なる、あるいは韓国の文化を遡っていった時、そ の起源の問題はどこにあるのであろうか。それにおいてはやはり韓国、韓半島におい ては大陸との、中国東北部あるいは山東半島地域との関係、交流ということが、日本に おいては朝鮮半島地域の交流が非常に大事であると共に、必須のものであると考えま す。</p> <p>その考えから、私が地域間交流というものが、古代国家の関係が始まるそれ以前に 盛んに行われていた、この地域間交流ははたして今日に言うところの国家の関係とし て理解することが十分なのか、という疑問を持つに至りました。</p> <p>ですから、宇宙の惑星の形成を考える時に、一つ一つの古代国家を一つの惑星と</p>

	<p>とらえると、その惑星がまだ混沌としたコアの状態から分離して、一つの惑星になるという状態から言いますと、日本・韓国の古代国家が形成される以前の地域間交流というのは、そういうコアと言いますか、混沌と言いますと混乱をイメージいたしますが、国家を形成する、そのような広い意味での混沌のなかの国家成立以前の地域間交流というのは、国家を生み出す広い世界史であろうと考えております。</p> <p>そろそろ持ち時間の10分がやってまいります、私がここで提起しているのは、個別の問題ではなく、それぞれの古代国家が、日本の古代国家、韓国の古代国家がいつの頃に成立すると考えればよいのか。あるいは諸先生方がどう考えられているかということをお尋ねしたいと思います。</p> <p>また、そうした古代の日韓関係史を世界史的な規模で把握するということがこれから我々にとって大事な課題であり、また、両国の人々の大事な教養の一つとして育っていくことになるのではないかと、という希望を持っております。</p>
金泰植	<p>濱田先生は主として幅広い問題について言及されました。では、続きまして趙法鍾先生もだいたい10分くらいで発表してください。</p>
趙法鍾	<p>それでは、準備してきた発表文に沿って簡略に申し述べたいと思います。古代韓日関係の成立を理解するためには、先ほど濱田先生もおっしゃいましたように、それに先立つ文化交流ないし関係がどうであったかを見なければなりません。すると、これには先史文化の段階から具体的な言及、および研究成果と内容の検討が必要になるということで、ここでは韓日の先史文化の交流について、ひとまず大きな節を設けて検討してみました。</p> <p>今回、韓日の先史文化の交流について韓国・日本関係の研究成果を整理する機会を得ましたが、その過程において、日本の弥生文化成立の重要な要素である水田稲作、そして青銅器・鉄器などの金属文化の伝来様相について、従来日本の学界の研究や概説書では伝来の主体や地域について少し幅をとって「大陸」とだけ表現する傾向が強かったということを、今回確認することができました。</p> <p>しかし、今回の研究活動を通じまして、私は関連研究を完全に包括したかたちで検討することはできませんでしたが、私が接した資料を見るかぎり、かなり具体的な研究が両国で出ており、これをもう少し具体的に明示する必要があるのではないかと思います。たとえば稲作文化の場合、韓半島の松菊里文化の影響が確実に両国で見られ、これについてはすべての研究者が同意していますし、青銅器の場合も細型銅剣つまり韓半島を中心に独自に形成された韓国式銅剣と呼ばれる韓半島中心の銅剣文化、青銅文化が日本列島に伝わったことが確認されており、これについてより具体的に言及する必要があると考えます。</p> <p>また、ここではふれられませんが、最近日本の〔佐倉の〕国立歴史民俗博物館が行った弥生時代の上限に関するAMSを活用した研究活動とその成果は、非常に留意すべきものであると考えます。</p>

	<p>しかし先に述べたとおり、弥生文化の形成に韓半島からの青銅文化が最も決定的に作用したという観点から見れば、韓半島の研究成果やその内容を十分に踏まえていない立場というものは問題があるのではないかと思いますし、年代上昇の問題について両国間でより深い研究が続けられる必要があるとも思います。それから、日本の対外交流についての最初の歴史記録以後に現れる、中国の山海経と漢書地理志の内容を見る時、日本の学界ではこの史料が中国との直接的な交流の出発とその根拠として用いられている場合を目にします。</p> <p>しかし今回の研究を通じて、これらの記録は古朝鮮の開国など、倭と奚の間に在った交流とその緊密な関係を説明したもので、そのことを根拠として現れた事件である、事実であるということが判明しました。また、衛満朝鮮の後に成立した楽浪・帯方などの郡県との関係についても同様に衛満朝鮮と倭との間に既に存在していた交流関係が前提となっているという、古朝鮮と倭との新たな関係が確認でき、このことを強調していく必要があると考えました。従来このような理解が両国の概説書や研究書では浮き彫りにされていなかったということもわかり、今後はこのようなことの意味をよりはっきりさせる必要があるのではないかと思います。</p> <p>一方、先ほど濱田先生も歴史時代における中国との関係にまで言及しておられましたが、その関係を念頭に置き、「重訳外交」という用語を設定してみました。今回の研究を通じて、古朝鮮および三韓と倭との関係を説明する用語として「重訳外交」の存在が確かめられました。</p> <p>東夷世界において中国との関係を維持していくにあたり、重訳を行う重訳国家と被重訳国家との間には、種族間で「附庸国」的性格の関係が存在していたことを、中国史書の記述から今回確認いたしました。したがって、また三韓が倭を郡県に中継する、繋ぐうえで重訳をおこなったという記録が確認され、このような関係が似たようなかたちで維持されていたことがわかりましたので、このような古代の重訳外交による三韓・倭等の関係について、より具体的な検討が今後さらに進められなければならないと考えます。</p> <p>このような文献的研究そして考古学的研究を、私が及ばずながら行いました過程で感じたことは、先史古代の韓日関係を理解するためには特に今後の両国の考古学的成果を体系化し、まとめられる、統合できる、そういった研究が非常に高い関心とともに進められなければならないと考えます。このような研究の必要性を今一度再確認いたしました。</p> <p>こういった幅広い研究テーマについては、先ほど濱田先生が提起しましたように、共同の議論を通じてもう少し深められればと思います。以上です。</p>
金泰植	<p>趙法鍾先生の発表は、大きく三つの問題と見ることができそうです。稲作と金属文化の韓半島から日本列島への伝来について少し具体化させる必要があるのではないかと、これが一つ。二つ目は、韓半島と日本列島との関係は古朝鮮時代から始まったものと見なければならぬのではないかと。そして三つ目が、重訳外交という体制があり、</p>

	<p>そのような関係としての国際関係をさらに具体化させる必要があるのではないかというものでした。第一と第二の問題は濱田先生が提起した韓日関係の始点をいつとするか、または地域間交流と国家間交流、地域間交流を国家間交流と認めることができるのではないかという問題とも関連してくるように思います。</p> <p>まず、趙法鍾先生の発表のほうがより具体的な内容でしたので、これを土台として会議を展開していこうかと考えます。まず趙法鍾先生の問題提起につきまして、濱田先生よりお言葉を頂けますでしょうか。</p>
濱田耕策	<p>私が趙法鍾先生と同じ時代を担当したということから発言いたしますが、共同研究の座談会でありますので、時代を異にした部分を担当した先生にもぜひいろいろなご意見をいただいて、私のように固まった頭をぜひ打ち割っていただきたいと思っております。</p> <p>そこで、確かに日本の研究、日本の理解の中には、稲作文化あるいは青銅器文化は第一次的には地理的に近い朝鮮半島から入ってくるのは確かでありまして、〔韓国忠清南道の〕松菊里を中心とした稲作、あるいは住居の文化というのは、松菊里から韓半島南部、そして北部九州へ伝わってまいります。それは疑いようのないことであります。</p> <p>しかし、九州大学の宮本一夫先生も積極的に研究されていますように、稲作文化のさらにその前〔段は〕、山東半島を経由して、そして朝鮮半島西南部から日本へ入ってくるという広いルートで考えておりますし、また青銅器文化も直接的には韓半島から日本列島へのルートではありますが、ではその前はどうか、という見方が日本の学界では問われており、その意味では東アジア史的に見る、あるいは世界史的にそういう文化の伝播というものを考えるということは非常に大事です。その中の局所的に見ると、それは韓半島から日本列島へという最終的な伝播の一つの形を見ることは誤りではないでしょう。</p> <p>2番目の問題について私の意見を申し上げます。古朝鮮時代における倭との関係も研究する必要が今後あるということでありまして、これはいわゆる考古学が発掘したところの両地域における文化の伝播状況といったものから、それを絶対年代として、どの時代に設定するかという問題とかかわってくる問題提起だと思います。</p> <p>『山海経』や『漢書』地理志等々に倭が出てまいります。これは、何らかの倭に関する情報が記録者側に入っているわけで、このような情報は中間にある古朝鮮地域の人々との交流が土台にあるということが十分に推測できます。</p> <p>このような文献は非常に断片的、たいへんわずかです。やはりわずかな文献記録に表れた交流というものの実態を表すのは、やはり土に埋もれた文化財を読み解く考古学に期待するところが大きいと思います。そういった時代の両地域の交流がやがて3世紀、4世紀の日韓関係を生み出す、言わば歴史的な土壌になっていると考えます。</p> <p>3番目の重訳外交という点であります。この両地域、韓半島地域と日本列島西部</p>

	<p>地域との間で、それまでのいわば緩やかな交流をより強い王権と言いますか、一つの権力の集中という方向に持っていかうとしたのは、ありきたりの考えかもしれませんが、やはり漢の武帝が古朝鮮を滅ぼしてそこに皇帝権力の直接の出先である四つの郡を置いたということは両地域のそれまでの交流を劇的に変化させる事件であり、これは無視できない。そこを過度に強調するのも問題ですが、これは無視はできない、よく考えなければいけない問題だと思います。</p> <p>そこで、この三韓が倭を楽浪郡、帯方郡に案内すること、倭の国々が楽浪郡、帯方郡に使節を送るということは、当然にも三韓の国々との連携の下で、あるいはその土地を経由しながら出かけるということは考えられます。趙法鍾先生の問題提起は、中国王朝に案内して、言葉を中国語で通訳をするという立場の国が、案内される種族あるいは国家に対して、これを附庸国と見なしている関係が存在したであろうという仮説です。</p> <p>少し外れますが、古代史の論文を読んでいまして、ふと、概念について疑問に思うことがあるのですが、ここで言う「附庸国」という関係はどのような関係のものとして理解して良いのかということについて、この言葉を書く人と、それを読む人の間で差異があってはいけませんので、後で趙法鍾先生に、ここで言う附庸国の関係というのはどういう実態なのか、あるいはどう定義するのかをご紹介いただきたいのです。いろいろな段階があるだろうと思いますので、一概に附庸国という用語でもって両者の関係を決定してしまうのも行きすぎであって、多様な関係があるだろうと私は考えます。</p> <p>私の見方では、重訳する使者あるいは国家は、重訳される使者を伴うことによって、自己の中国王朝から受ける評価が高くなるという点を、まず押さえるべきだろうと考えます。</p>
金泰植	<p>濱田先生が趙法鍾先生の意見に対して三つの簡潔な答えをくださいました。稲作や金属器文化が韓半島南部から北九州に伝わったことは明らかであるが、東アジア的観点から見れば、日本的な表現が誤っているわけではないというのが第一の問題に対するお答えであったと思います。</p> <p>第二は、古朝鮮と倭との関係について考古学的調査がまず為される必要があり、文献等では少し不確実であるとのことでした。第三の重訳外交については、趙法鍾先生のご意見に対し、もう少し具体的な証拠を見なければこういった話はやらないのではないかということであったと思います。</p> <p>趙法鍾先生、時間がありませんので少し短めをお願いします。</p>
趙法鍾	<p>はい、おっしゃる通り、稲作文化と青銅器文化の韓日関係の様相を説明する上で、東アジア史的観点から説明するというのは当然必要なことと考えられます。そのような脈絡で、大枠での話と具体的な話がもう少し分けられたかたちで説明される必要があるのではないかと思います。そして、いずれにせよ稲作文化は技術を持った集団の移動が前提となりますので、ただ種籾がどこから来たのかではなく、それを作り出し再生産できるシステムがどういった集団を通じてやって来たのか、そのような観点からそ</p>

	<p>の意味を明らかにしていかなければならないのではないかと、といったことを申し上げたかったのです。</p> <p>青銅器・鉄器など金属文化も同様に韓半島で新たに中国の青銅器文化とは別途の全く新しい青銅〔器〕文化の完成と言いましょか、それが同一の形態として日本でも共有されていますので、そういった脈絡での接近、そしてそれがその次の段階に繋がっていきますが、実際古朝鮮にまつわる倭との関連記録がないので〔事実が〕ないのではなく、記録がないことと事実がないことは違う問題であるとするれば、むしろ考古学的細型銅剣文化に象徴される文化の相当な波及が、古朝鮮からの絶え間ない、多くの人口の移動と言いましょか、そういった南への移動があった時、その繋がりの中で説明されるのではないかと思います。この脈絡で考古学的研究成果がもう少し文献的な内容を補完すれば、より実相が見えてくるのではないかと。〔濱田〕先生がおっしゃったことにつきましては私もまあ基本的な立場は同じだと言えます。</p> <p>それから〔濱田〕先生が重訳外交に関わる話のなかで、重訳外交の性格はともかく、重訳国家や被重訳国家や種族との関係での附庸的關係といったものは突然出てきたものではなく、高句麗と肅慎との関係、百済や新羅と周辺国家、あるいは別のもの、私が全ての重訳の事例を遍く検討することはできませんでしたが、そのなかでほとんど類似した様相として附庸国という表現が出てきます。そうした状況でしたので自然な政治的、国家間の上下関係の様相を説明する用語を連繋させたのです。おっしゃるとおり、私がもう少し細かく内容的な補強を進めていこうにしたいと思います。</p>
金泰植	<p>趙法鍾先生のご意見の前者二つは、濱田先生とそれほど大きく違わないとおっしゃっています。3番目がやはり問題になってくると思います。</p> <p>濱田先生、もう少し話されますか。</p>
濱田耕策	<p>いいえ。他の分野の先生方のお考えなどで良いヒントをいただきたい。</p> <p>趙法鍾先生が三つのテーマについていろいろ意見を交換いただきましたが、他の先生からも意見をいただいたらどうでしょう。</p>
金泰植	<p>では他の先生方、全体的な内容についてお話ください。</p>
坂上康俊	<p>では、私の方から、稲作の日本への伝来については、やはり趙法鍾先生のおっしゃったように、集団による移住というものがあつたはずで、日本の学界ではやはりその移住のきっかけというものがどういふものなのか、というのが、非常に気になっているのだろう、と思います。つまり先ほど趙法鍾先生が「南へ南へ」とおっしゃった、その南へ移動しようというその契機というものが、ひょっとすると中国におけるいろいろな戦乱など、そのような原因を考えるうえで、やはり東アジア全体の中で稲作の伝来を、日本では考えようとしています。そういう研究をする必要があると考えるわけです。</p>
趙法鍾	<p>はい、私も同じ立場です。実際、そういった多様な東アジアにおける文化交流やそれにつながる人口移動や状況が、どういった状況であつたのかを今推測することは非常に難しく、いま残されている中国史料にいくつか政治的激変と言いましょか、あるい</p>

	<p>はある状況について説明してはいますが、実際問題、人口の、人の移動を一つや二つ、いくつかの史料のみをもって説明することはできませんので、いずれにせよ東アジア史的な観点で我々が理解しようということには当然同意しますが、それを特定することが叶わない今、歯がゆい状況であるというのが現実のようです。</p> <p>それは様々な要素を今後も研究を通じて確認していく必要がありそうですが、おそらくその前から既に継続的な交流がありましたので、そのような交流のネットワークの線上からも、このような移動の原因、あるいは可能性を確認できるのではないかと。全く何もないような新天地に行ったのではないでしょうし、何かがあると知っていたので、かなり以前からあった交流のひとつの延長線上に連なるのではないかと思います。</p>
金泰植	<p>この問題は日本から眺める「大陸」という用語と韓国から眺める「大陸」という用語の概念の差があるのではないかと考えられます。日本で「大陸から来た」と言う時、韓半島を含む大陸を指すという史料例が多くあるのでしょうか。韓国では「大陸」と言えばほとんど中国と同一のものを見なします。その点について日本側のお二人はどのような観念をお持ちか、お話しいただければと思います。</p>
坂上康俊	森先生。
森公章	場合によって。
濱田耕策	文脈によって異なります。
森公章	<p>通常、文脈によって、要するに大陸という時に中国、朝鮮半島を含めていう場合もありますし、朝鮮半島という時は朝鮮半島と言い区別する時もあります。大陸文化の伝来という時には、たとえば、飛鳥文化なども大きく大陸文化の伝来と言うと、書き方で変えるわけですね。当然そこは百済や高句麗などという朝鮮半島の文化が来ているわけですが、それはやはり広く大陸文化の伝来と表現することもありますから、日本で大陸という時にはやはり両方[だと思えます]。朝鮮半島・中国を含める時もあり、少し用法が曖昧だと思えます。</p>
金泰植	<p>しかしですね、このようなことについて韓国人が疎外感を感じるのとは何かというと、青銅器文化が日本に渡ったと言う時、その青銅器文化は細型銅剣系統が基本となっていて、結局これは中国にはない、韓国にのみ存在するものなのです。中国の青銅器自体は、製作技術自体は中国から伝来したとは言え、文化全般は韓半島で醸成された韓国の古代文化でしょう。それが日本に渡ったのであって、中国系統のもので日本に渡ったものはないにもかかわらず「大陸」と表現する、それについては若干の寂しさをおぼえると言いましょか、そういった点から少し問題提起をしなければならないのではないかと思います。</p>
趙法鍾	<p>文化系統の区別をするべきなのにしないという問題、そういうことをおっしゃっているのでしょうか。</p>
濱田耕策	<p>文化を巨視的に見るか、局所的に見るかという違いがそこにあるかと思えます。</p> <p>私は先ほどの坂上先生と趙法鍾先生の議論を聞いて考えることは、文化は人と共</p>

	<p>に伝来するという面と文化の具体的な作品が伝播するということがあるかと思いますが。私は韓国古代史を勉強しておりますが、いろいろと勉強する中で、一体、韓国人というのはどこから来たのか、日本人はどこから来たのかという課題があります。韓国人というのはどこから来たのだろうか。古朝鮮以来、全然変化がないのだろうか。日本では「渡来人」というテーマで一定の集団が国家形成に活躍したことに関心が及びますが、韓国においても渡来、人の移動、外から人が移動してくるということは、考えていいのではないかと、時々考えることがあります。</p> <p>それは先ほどの稲作の伝来や青銅器の伝来というようなことが、その青銅器のみが南下したのではなくて、やはり北方から人が移動して来るという、文化の伝来と共に人の移動ということも、記録には現れませんが並行的に考えなければいけない問題だと考えています。</p>
趙法鍾	<p>ええ、ごもっともなお話だと思います。ですから、事実はさきほど東アジアという話が出ましたが、東アジアを構成する枠をどのように理解しているのかわかりませんが、一般的に東アジアと言えば中国文化の外縁拡張の枠を前提として説明する場合が、ともすれば先入観ということになりますが、文化歴史学の方面ではそのような傾向が少し強かったという気がします。ただ私が最近このような先史時代に関する資料を整理していく過程で、むしろ古代先史へと遡るほどに中国の、具体的に言えば中原の文化と言えますが、その文化はかなり小さく、波及力もそれほど強くなかったということを感じました。かなり時代を下ってからその影響力が強まったのであって、むしろ我々が俗に北方の文化と称する文化が相対的にかなり疎かに扱われ、あるいは弱く説明されているのではないかと気がします。たとえばいま現在、日本と韓国は言語・文化的にかなり似ているという繋がりを持っており、中国は全く違う、そういった文化的系統にあるという痕跡を見るだけでも、繋がりや痕跡や繋がり中国からどういった影響を受けたのか、特に人から影響を受けたとは見なしがたいということが、言語的現状の結果からのみ逆に推定しても、中国とは全く別の言語文法・構造的体系と内容を持つということが中国のある文化が韓国とは完全に異なったものであると説明される大きな例と考えられます。すると、このような韓国文化の特異性が日本とかなり類似しているということについて、我々は注目する必要があると思われます。このような韓国と日本を繋ぐこのような独特の文化的様相が、濱田先生が指摘するようにどこから来たのか、実際それも大きな課題だと思います。日本のように島からなっている場合、その繋がりやルートは単純なものでしょうし、韓国はつまるところ巨大なアジア大陸に遍く繋がっているとすると、北方の文化というものの方が特に強く結びつく可能性があったと思いますし、そのような脈絡での韓国の文化的特性や独自性が特別強調されたものと思います。したがって、おっしゃるとおり今この時点で全て説明することはできませんが、そのような大枠の認識を持つてとはいえ、東アジアというのは少なくとも我々が考える中国文化の外縁拡張的空間ではない、全く新しい北方の遊牧・狩猟に象徴される文化に連なるそういったある文化</p>

	<p>生態的様相の繋がりの中に韓半島が位置しているということを念頭に置いて説明がなされなければなりませんし、具体的内容として青銅器もそこに含まれますし、その歴史の出発には古朝鮮も繋がっているのではないかと、そう思います。話が少し大きくなりすぎましたが、今後はこのような認識の枠を持ち、それを具体的にすごく細かく整理する作業が必要だと考えます。</p>
坂上康俊	<p>趙法鍾先生のおっしゃることはもっともで、もっと遡り人類学的なことから言いますと、やはり北方、シベリアとまでは言わなくてもいいかもしれませんが、そちらから現在の日本人の祖先が渡来してきたということはもう間違いないことで、それは北海道経由なのか、朝鮮半島経由なのかいろいろとあるかと思えます。</p> <p>それを前提にしてですが、だからこそ我々が「大陸」という言葉を使うのは、そういうのも全部含めて説明する時に使うのであって、たとえば「朝鮮半島」と限定してしまうと、一体どこからが朝鮮半島なのかという問題も生じてしまいます。</p> <p>今の朝鮮・韓国の文化の元になったのは、おそらく中国の今の東北部辺り、もう全部含めてかなり一体的な文化があったのではないかと、それを表現するのに「朝鮮半島」という限定した言い方をするとするのは韓国にとってもかえって今の領域に縛られてしまうような気がいたします。それを含めて、我々は「大陸」と表現したほうが良いと思っています。</p>
趙法鍾	<p>韓半島に限定したというものでは勿論ありません。</p> <p>先ほど申し上げた「北方」という表現が、少し曖昧ではありますが、韓半島と現在の満州、おっしゃるとおり中国の遼寧や東北地域を含むそういった空間が、いわゆる中原の農耕文化と代弁される中原文化とは別途の、独自性を持つ文化圏であるということ、そういった脈絡でご説明申し上げたかったわけです。</p> <p>そのような立場で韓半島と満州を包括する、ある文化的性格や特性、そういうものが韓国の青銅器文化や古朝鮮、その繋がりに高句麗、その後の歴史に連なるものと我々の方で説明がなされている、それらを土台として説明を、意見を述べたのです。</p> <p>先ほど濱田先生が述べられました、いつからなのかという問題と繋ぎ合わせてみましたので話がちょっと遡りすぎましたが、そういった脈絡で何か「大陸」という概念は相対的に我々はあるいは一般的には、中原文化のみに限定され誤解がされやすいために、そういったところを具体的に細分化して文化系統について言及することが一般人や学者間に誤解の無いようにしなければならないと思ひ、大陸の話が私が問題として取り上げました。</p>
金泰植	<p>これまで議論が第一・第二の問題に限定されているようですが、もう10分だけ議論いたしまして、この問題について終わらせようと思います。次のテーマと繋がりを持たせるためにも、3世紀段階の韓日関係の状況についてもう少し話し合いたいと思います。3世紀の韓日関係において、趙法鍾先生が重訳外交、すなわち中国に対して通訳をする国と通訳してもらおう国との差別性についてお話しされましたが、それについての他の</p>

	先生方のご意見はいかがでしょうか？
坂上康俊	<p>趙法鍾先生が「附庸関係」というのをどの時代まで下ってお考えなのかということと絡むと思うのですが、今金先生から3世紀ということで、このテーマと関連で質問ということでしたので、では邪馬台国というものが、はたして、もちろん直接帯方のほうに行く場合に朝鮮半島の諸国を経由して外交関係を成立させていったということはわかるのですが、しかし肝心の魏辺りは、別に邪馬台国が朝鮮半島の国の附庸国であるとは認識していない。結局その附庸関係というのは成立しなかったということも逆に言えるわけなので、その辺りについて少し説明がほしいと思います。</p>
趙法鍾	<p>はい、実際その問題は確認してみる必要があると思います。史料上は魏・晋との関係の中で重詔の記録が、今回私の研究の中で2件が確認されるのですが、それ以外の記録がありませんので実際は類推できないということが、私も残念に思います。しかし私が重詔という東アジア、東夷世界における外交関係、その他の事例といったものを類推して説明するほかありませんでしたので、ただ高句麗－肅慎の関係など、百済の新羅および周辺との関係においてどういった様相であったのかを類推してみたわけです。</p> <p>したがって、それをそのまま用いるわけにはいきませんが、またおっしゃるとおり当時の政治状況、様相から見て同じようなものを見るわけにはいかないでしょうが、そのような様相から大きく外れるとも考えにくいのではないかと、とりあえずそのようなかたちで今回の研究報告書を作成しました。</p>
濱田耕策	<p>この件はどういう問題を提起しているかということ、具体的な検討は坂上先生のおっしゃるようになります。これまでの半島地域と列島地域の関係のなかに中国の郡県支配という関係が割って入った時に、それまでの半島と列島地域の諸勢力のなかに新たにどういった関係が生まれるのか、という問題提起だと思います。</p> <p>このことはずっと後まで続きます。半島地域と列島地域の小さな政治世界の中に強力な権力が入ってきた時に、それまでの関係から、両者はどのように新たな関係を結んで動き出すかということの問題にしていると思うのです。端的な例は、午後の問題になろうかと思いますが、倭の五王などの中国王朝に対する外交のあり方、あるいは百済・高句麗が中国とどう外交していくかということの初期のモデルになろうと思います。</p>
金泰植	<p>私が時間を取りすぎまして具体的な話が少しできない可能性もありますが、とりあえず午前最初のテーマ、古代韓日関係の成立についてはこれでおしまいいたします。お疲れさまでした。では15分休憩いたしまして、二つ目のテーマに入りたいと思います。</p>

古代王権の成長と日韓関係

(1) 4世紀の日韓関係

金泰植	<p>それでは、二つ目のテーマについて始めたいと思います。二つ目のテーマは古代王権の成長と韓日・日韓関係です。</p> <p>このテーマは私が当事者ですので、司会を趙法鍾先生にお任せします。</p>
趙法鍾	<p>はい、では私が司会進行を担当いたします。今準備されたレジュメは金泰植先生のものがあります。森先生は口頭で行われる予定ですね。あ、すみません。濱田先生と関係する部分もまだ残っていました。では進行を、濱田先生からまずお話しいただけますか。実は新しく濱田先生が七支刀銘文をもとにして日韓関係、また広開土大王碑文に関わることについても新たに準備されましたので、これの内容について簡略にご説明いただきながらお話いただければと思います。</p>
濱田耕策	<p>私が広い範囲を担当していることもあり、第2テーマである「古代王権の成長と日韓関係—4～6世紀—」という範囲の中で、第1章の「4世紀の日韓関係」を担当しています。</p> <p>そこで、4世紀の日韓関係を考える時の二つのテーマとして、七支刀銘の日韓関係、すなわち百済と倭国の国家関係というテーマと、広開土王碑文の日韓関係、すなわち、高句麗、新羅、倭国の国家形成という二つの小テーマを掲げております。</p> <p>このテーマについては、私は第1期の日韓歴史共同研究委員会で取り扱ったテーマでもあります。そのこともありまして、第1期の報告書を出した後、3年ほどたちますが、この二つの史料に対して大きく研究方向を変えるような研究動向、研究成果は出ていない、と私は把握しております。</p> <p>まず、この七支刀について日本の学界の大方の見解は微細に見れば違う点があるのですが、大きく言えば、百済の近肖古王が高句麗の南下という大きな圧力の下で倭国に七支刀を贈り援軍を求めた。七支刀とはその記念といひましようか、記念碑的な贈答品の刀であるというふうに理解されております。</p> <p>しかし、微細に見ると、371年に高句麗の故国原王が百済の兵によって平壤の地で戦死してしまうという、高句麗と百済との大きな戦いの中でもうすでに倭人の兵が百済軍の中に援軍として加わっており、その戦勝の記念品として倭王へ贈った、という説もあります。</p> <p>七支刀が百済で作刀され、そして倭国に贈られた、その国際的な背景について、いろいろと議論はありますが、詰まるところ百済と倭国との軍事的な連携を結んだことを象徴する記念の七支刀ということは間違いなからうと思います。私はその中でも、百済は東晋との関係を背景に置いて、東晋・百済・倭国という連携を百済が積極的に結んだ、そのような百済の積極的な外交姿勢を評価しております。</p>

	<p>次に、そのことを受けて、4世紀末から5世紀初めの日韓関係を考える時に重要な史料である広開土王碑文の中の倭との関係記事を解説し、他の文献史料との比較検討を行いました。これも第1期の日韓歴史共同研究委員会で取り上げまして、それ以後、この碑文解釈については、日本では大きく解釈を進めるような研究は出ていないと見ております。</p> <p>碑文の拓本について、これに関する基本資料の研究は武田幸男先生によって、これまでの研究とその後の研究がまとめられ、2冊の著書として出版されております。</p> <p>武田先生は、いわゆる辛卯年の条で現在では読めない部分の1文字を「東(ヒガシノカタ)」と読んで、「倭が百済を破り、東に転じて新羅を□する」というように、新たに「東」を読んだことが注目されます。</p> <p>以上で、広開土王時代の半島地域と列島地域の激しい、ある人に言わせると17年にわたる戦争を経て、5世紀の新たな東アジアの国際的な外交活動が始まるというところで、私の研究は終えて、森先生にバトンタッチすることになります。</p>
趙法鍾	<p>今日新たに配布されました二つの資料についての簡単な概要と、新しい立場と言いましょか、実際はこれまで研究されてきた内容に大きな変動はなかったということで、ただ七支刀は4世紀の百済と日本の関係を明確に説明しており、百済に援軍を送ったことに対する贈答品であると日本の学界が認識しているという立場、その次に広開土大王碑については、新たな解釈が武田先生によって一つ二つ行われ、それを土台として全体の内容が一部、新羅との、高句麗との関係をもう少し見ていくことができるのではないかというようなことだったと思います。</p> <p>いずれにしても、議論を少し具体化させるために金泰植先生が準備されたものを今発表なさいますか。…では、[まず]森先生が研究されたものを紹介して、その後に金泰植先生のもので関連づけて総括するようにいたしましょう。</p>
盧泰敦	<p>午前の時間を考えた場合、全部やると混乱しますので、濱田先生がおっしゃった内容についてのみ議論して、[それ以外は]午後に持ち越してはいかがですか。</p>
趙法鍾	<p>はい、それでは4世紀についてのみ行い、金泰植先生の1・2・3が4世紀までの内容になりますので、そちらをまず発表していただき、議論を午前中のうちに終わらせるかたちで進めていきます。</p>
金泰植	<p>それでは私のほうから問題提起をいたします。最初に、日本書紀神功49年条の解釈を通じて369年の倭の任那征伐を史実と認める見解がありましたが、近來の学界ではこれを否定するものが殆どであると思います。とすると、典型的な任那日本府説は崩壊したと見て良いでしょう。しかしその史料すなわち神功49年条の価値と性格及びその意味についての議論は様々であるように思いまして、これについての議論が必要だと考えます。</p> <p>次に、広開土王陵碑文にあらわれる倭軍の性格について、概ねそれが日本の</p>

	<p>畿内の大和勢力の派遣軍であり、ただし各国の対等な国際関係のなかで入って来たものであると見ています。しかもその倭軍の数は高句麗の大軍に比肩するほどの多勢ではなく、武装も加耶に比べて貧弱であったという事実を考慮に入れば、事実上広開土王陵碑にあらわれる倭賊または倭軍とは加耶・倭の連合軍であったと思われませんが、碑文ではこれを「倭軍」と誇張したのではないかと考えております。これについての見解を伺いたいと思っております。</p> <p>第三に、これまで、韓国も日本も同様ですが、古代史において韓日関係史の中心地域は加耶地域であります。加耶地域の独自の王権に対する理解が不足していたように私は考えております。4世紀以前の前期加耶は、慶尚南道金海の加耶国あるいは金官国ともいいますが、その加耶国を中心に形成された小国連盟体でありましたし、5、6世紀の後期加耶は、慶尚北道高霊の加耶国あるいは加羅国ともいいます。この高霊の加耶国を中心とした小国連盟体であり、6世紀前半には加耶北部地域に古代国家としての体制を整えていきます。ですから、加耶が4、5、6世紀の300年の間ずっと、新羅や百済に比して勢力が小さかった、分裂していたため力が無かった、などという認識は修正が為されなくてはなりません。これについてももう少し議論してみたいところです。</p>
趙法鍾	<p>はい。いま金泰植先生は三つに分けて問題を提起なさいました。一つ目が『日本書紀』神功49年条の解釈について、既往の学界の研究成果はこれを否定する立場であると見なすことができ、それにより任那日本府説の代弁者であったこの史料を否定することは、つまりは任那日本府説を理解する認識のいわゆる日本的認識の枠組みを崩壊させるものと見ることはできますが、そうするとこれを果たしてどのような方向に解釈し議論するべきか、より具体化させなければならないのではないかとこのものでした。</p> <p>二番目として、広開土王碑にあらわれる倭軍の性格は、加耶・倭の連合軍が誇張され「倭」と表現されたものと見るができるという意見でした。</p> <p>そして最後に、加耶の独自王権に対する韓日両国関係の認識と言いましようか、それについての理解が少し不足しているようだ、独自王権、独自国家としての性格を強調する必要がある、こう仰いました。</p> <p>これについて濱田先生、ご意見をお願いします。</p>
濱田耕策	<p>私の見解を申しますと、『日本書紀』に表れる、特に神功皇后紀49年条、あるいは52年条など、朝鮮半島南部地域、加耶・百済を中心とした日本中心の歴史像というのは、その物語を形成しているさまざまな要素を大いに吟味しながら、分解していかなければいけない、そういう史料だと思っております。その中で何が残るかということが非常に大事で、そのような視点で『日本書紀』の、いわゆる朝鮮関係記事というものは読むべきだというのが、私の基本姿勢です。</p> <p>49年条は確か、高句麗・百済・新羅が神功皇后の軍隊によって征服され、以後</p>

	<p>朝貢を誓ったという記事だと記憶しますが、その記事のことは、そのとおりでは否定されるべきでしょう。しかしながら、後世『日本書紀』を編纂する過程において、これまでの朝鮮半島の地域と、ここで言うところの日本の大和朝廷なり大和政権との関係をどう振り返って構成するか。それは今日から見ると非常に恣意的な歴史像でありますが、まったくの荒唐無稽、夢想とは私は見ません。ではどこまでが史実を反映しているかということを読み取るということが大事だと思います。</p>
森公章	<p>49年条は加耶七国平定ではないですか。</p>
濱田耕策	<p>加耶七国平定でしたか。[手元に資料がありませんので]先ほど369年は百済・新羅・高句麗を平定したという記事だと言いましたが、森先生からの指摘で、加耶の七国平定記事であると訂正いたします。</p> <p>また、広開土王碑文に現れる倭寇あるいは倭賊などは、加耶と倭の連合軍ではなかったか、それを碑文が非常に倭軍を大きく誇張している。そしてこれを打ち負かした高句麗軍の強さを表現したのである、という見方があります。そこで、近年、倭寇・倭賊の存在は碑文では誇張されたものだということで、その力の評価を小さく見る見方が出ております。</p> <p>私はこれに対して、広開土王の軍隊が5万の歩騎兵であった、これが実数であるかどうか。広開土王の碑文の中で、最終的には高句麗は百済を朝貢国とすることはできなかった。高句麗は新羅を朝貢国とすることはできました。倭賊を最終的に絶滅できてはいない。加耶も全滅していない。王は5万の軍隊を2度ほど派兵しても、朝鮮半島全体を高句麗の支配下に収めることはできなかった。そして、それはまた7世紀まで、さしもの高句麗がこの半島全体の唯一の王権の国家としては成立できなかったのはなぜだろうか、ということも考えるのです。内部的な問題もあるでしょう。外部的な問題もあるでしょう。そうした時に、この高句麗の5万の兵というのが、果たして実数であったのか、というようなことを疑問に思っております。</p> <p>碑文の中に、高句麗と敵対する倭賊には、倭賊単独ではなく、やはり百済軍も、あるいは加耶の兵も、ごちゃまぜではなくても、連携して高句麗軍と戦っていた、ということは想像できます。</p> <p>3番目の話題の加耶については、大変面白い指摘であり、さすがに「現代の加耶国王」というか、加耶の専門家の金先生が加耶を再評価しなければいけないという指摘はそのとおりだと思います。</p> <p>百済・新羅・高句麗に比べると、加耶は地理的には洛東江下流域を中心として、その東西という限定された自然条件、それから政治的には西に百済、東、北東に新羅、そして海の向こうに倭という、三方を囲まれている。その三方からプラス、マイナスの影響などがあり、この加耶諸国は小国連盟体から独立の古代国家としては、なかなかたいへん難しいコースを歩まざるをえなかった。</p> <p>そういうこともあり、高句麗・百済・新羅に比べると、加耶は小さな勢力だという認</p>

	<p>識ができてしまっている。しかし、これは見方を変えれば、倭国の文化形成に大変大きな影響を与えたという評価もできるわけです。</p>
金泰植	<p>まず神功紀49年条のなかで高句麗・百済・新羅が倭に朝貢したとあるのは史実ではないが、加耶七国平定は何らかの事実としての性格を含んでいる、そうおっしゃったように思われますが、そういうことでしょうか。</p>
濱田耕策	<p>いや、違いますね。私はそこまでの見解は出していないと言えます。基本的にはその中からどんな事実を反映した記事であるかということを考えなければいけないということです。</p> <p>加耶七国を平定したとは忠実な意味では「平定」ということではないでしょうが、この369年という半島と列島の国際関係を考えると、高句麗と百済が戦っている中で、その時に倭人の兵も百済軍に参加しているのではないかという、学説が日本にはあります。その学説の人々は、その倭人の兵というのは加耶地域でも何らかの共同行動を取っているだろう、その共同行動を後世で、どのように自己の立場からの歴史像として記録するかということです。</p> <p>このような見方から『日本書紀』の神功皇后紀49年条ができていないのか、という見方もできるのではないのでしょうか。</p> <p>私はその立場に立つ、立たないは別として、歴史書は全くの空想、自己都合の空想と言って否定するという姿勢はとらずに、このことは歴史のどういう部分を反映しているのであろうか、と考えるのが、文献史学者の私が解釈する姿勢です。</p> <p>ただ、この加耶七国を「平定」したということは、それは否定されるでしょう。「平定」という今日的な解釈でいう軍事的に押さえてしまって、もう占拠したのだという意味の「平定」であれば、それはそうではないでしょう。</p> <p>では全く、この49年条は全部消していいのか、と言えば、消してしまうということはいかない。何かその核になるものがあつたに違いない。それを考えなければいけない、というのが私の基本的な姿勢です。</p>
金泰植	<p>まず、4世紀の韓日関係は文献が未だに不十分なところが多い時期ですので、とりあえず韓日関係の趨勢は考古学的な発掘成果を土台として設定されなければならないと考えています。これまで私の研究したところによりますと、4世紀には加耶地域では金海という中心が明らかになっていき、そこに加耶国が他の加耶地域全体に比べ10倍以上の規模、また10倍以上の副葬品を納めた古墳が作られ、加耶地域に明らかな中心の形成がなされていきました。そういったことは日本列島でも同様で、日本列島も3世紀後半から近畿地方に勢力の中心が形成されています。</p> <p>そして、その加耶中心地の古墳の規模や副葬品の水準は新羅と比べても全く見劣りのしないものです。当時の韓日関係は、日本列島で出土するまたは製作された鉄の素材が加耶のものだと推定される関係、こういったことが基本となっていると考えます。</p>

	<p>さらに現在までの研究結果として、日本地域や加耶地域から百済系統の遺物は殆ど出てきておりません。したがって4世紀の韓日関係は、とりあえず加耶地域と日本の近畿地域との緊密な交易が基本の土台となっていると解釈しなければなりません。</p> <p>さて、神功49年条は、倭軍と百済軍の混成軍である倭軍が加耶七国を平定したとしていますが、それに対し『日本書紀』に別の記録があります。欽明紀のなかで、近肖古王代の事実に言及して百済の聖王が、その当時近肖古王代の加耶と百済は兄弟関係を結び、その時から親しい交流が始まったと、こういった言及をしています。こちらのほうが事実の可能性が高いと思います。したがってそれら二つを結びつけて考えますと、当時の、ですから4世紀後半の百済が金海の加耶と結びつきを持ち始め、その時百済は間接的に倭と繋がっていたに過ぎず、そこにはいかなる軍事関係も、軍事的な服属、こういったものは全くなかったと考えられます。</p> <p>こういったことが私の基本的な考えです。しかし濱田先生の見解では、七国平定が全くの空想ではなく、何かがあり、事実としての性格を持つものとされ、372年の七支刀を百済が贈ったものと見ておられ、それはおそらく369年条の倭軍の貢献に対する百済の報答ではないかとおっしゃいました。それは、49年条の事実としての性格をかなりの部分認めているように感じられます。</p>
濱田耕策	それは誤解です。
金泰植	<p>東アジア全体を見ても、鉄剣にこのような銘文を刻んだという考古学的遺物は、5世紀後半から6世紀初めに盛んになりますので、我々加耶史研究者は七支刀もやはりその時期のものであると見ています。したがって七支刀を4世紀、372年のこの時期のもつと認めるならば、やはり369年条に何かもう少し、史料の表現と似通った事実としての性格があると、そう結びつけていく可能性が高いのです。ですからそのように認める場合に369年条、すなわち神功紀49年条をどう理解されているのかについてももう少しはっきりとしたご意見をお話いただければと思います。</p>
濱田耕策	<p>私も、たとえばこれまで重視されることが少なかった『三国史記』の新羅本紀に出てくる倭人の動向、すなわち、3世紀、4世紀、5世紀にかけても盛んに新羅に侵入しているという記事が連続的に出てくる。これらをどう日韓関係史の中で理解するかという問題も、この神功皇后紀49年条、あるいは七支刀、あるいは広開土王碑文を通して見た日韓関係の中にこの『三国史記』新羅本紀の倭人の動向をどう位置付けて理解するか、という問題も新たに起こってくると見ています。</p> <p>我々はこうして会議をした後、お互いに記録を作って、照らし合わせて合意しますが、古代において加耶と倭が何か行って直後に相互に記録を交換すれば、今日、我々が議論するような問題は起きないのです。しかし何か関係があって、そのことを時代を下って、それぞれに歴史観を持ちつつそれぞれの国家を正当化するという立場で過去の間関係を編纂する時に、いろいろと誇張、自己の都合のいい叙</p>

	<p>述をしてしまうのです。これは余談ですが。</p> <p>平定は、今日的な七国を「平定」したということは否定されても、そこには倭と加耶とが何らかの関係や交流があり、その背景にその向こうに百済との関係もあるという中国南朝の東晋や百済・加耶・倭という連携、これはこの4世紀後半以降形成されて来ます。</p> <p>北方の高句麗が、あるいは中国の北魏や中国北方の王朝と結び、高句麗・新羅という北のラインも形成されてくる。そういう文脈でこの4世紀後半の東アジアを考える時に、「平定」ということにかかわらず、そこに加耶地域と倭人、倭との間に関係史ができています。</p> <p>加耶も連合体でしようし、日本列島も大和を中心として、北部九州の地域、あるいは瀬戸内海地域、そういうところをつなぐ連合体ができていてと見てよろしいと思うのですが。そういう中で、七国平定というのは、「平定」ということは否定しても、そこに関係はある。その関係は、軍事的な「平定」なのか。いや、協力なのか。それを後世の人は「平定」と記述しただけで、実際は「連携」ということも考えられます。</p>
金泰植	<p>今私が聞いた限り、濱田先生のお答えに少し発展がありましたね。さきほど最初にご発言された際には七支刀について東晋と百済と倭の関係がそこに見えるとおっしゃいましたが、今は東晋と百済と加耶と倭の関係が見えるとおっしゃってくださいました。濱田先生、加耶の存在を認めて発言していただき、ありがとうございます。</p> <p>次にもう一つの問題は、加耶七国平定は否定される交流があったとおっしゃいましたが、これは私も同じ考えです。ですからその史料に表れるのは、結局は百済と倭のあいだに加耶七国があり、これを通じて百済と倭が結びついたということの表現であると、私は思います。したがってそのような交流があったというのもっともだという気がします。</p> <p>次に、新羅本紀にあらわれる倭人や倭兵の動向ですが、結局倭寇や倭兵は新羅を攻撃する存在としてのみ多く登場し続け、その後現れなくなります。やはりそれは、その当時倭兵がかなりの部分で加耶の利害関係を反映しつつ動いていたということです。ですから当時の倭兵は結局加耶とは親密でしたが、加耶のライバルであった新羅側をある程度攻撃する際に協力するという姿勢を見せていたわけです。新羅本紀にあらわれる倭の動向を考古学的な動向と合わせて考えてみますと、正しいと思われる面があります。もちろん時期編年上、若干の修正も必要ですが、そのように見れば神功紀49年条の解釈において大きな誤りはないのではないかと思います。</p>
趙法鍾	<p>実際、この問題はどうしても長くなるほかなさそうなお話ですから、ここで終わりにしましょうか。他の先生方、何かその他のコメントはありますか？</p>
森公章	<p>2点あります。</p> <p>その神功49年条なのですが、次の5、6世紀とも関係しますけれども、『日本書</p>

	<p>紀』の基になったいわゆる「百済系史料」というもの、つまり神功49年条には倭と百済が協力をして加耶七国を平定して、そしてそれを百済に付けたということになっていますから、そこにはやはり百済の立場に立った主張というものも反映されている。というより、そこに『日本書紀』が基にしている百済系史料、そういう百済の目から見た倭や加耶というようなことも考えていかないとけないのではないかということを感じました。それが1点目です。</p> <p>それから2点目ですが、加耶史の研究がなかなか日韓共に不足していることに關してなのですが、我々の研究会で日本に来ていただいた時に、やはり各地に加耶系の遺物や韓国式土器、韓式土器というものがあり、各地域ではそれなりにどのような加耶の土器が入っているかは整理されていますけれども、それを全体として、加耶のどの国からどの時期に日本のどの地域に入っていたかという研究はなされていません。これは文献史学をやっている者から考古学の人に対するお願いというか、注文というか、こういう研究をしてくれたらいいなことなのですが…。なかなか日本では自分の住んでいる地域についてはそのように整理するけれども、全体として加耶史を考えるという視点はなかなかありませんから、ぜひその韓国の加耶考古学の人に、つまり加耶のどの地域の土器がどこへ行っていて、あとどの時期に行っているかということが解明されると、やはり文献の少ないこの4世紀の倭と加耶の具体的な関係というのが判明するのではないか。これは感想とお願いということです。</p>
<p>金泰植</p>	<p>森先生のご意見は今後我々の研究がこういったことを反映させつつ考えていかなければならないということでもっともなご意見ですし、神功49年条に百済の立場が基本的に反映されているということも、もっともであると思います。ただ神功49年条は研究者であればほとんどの方がご存知の通りそこに「平定」という用語など、その中に一部は1世紀、干支一巡りを加えて見なければならぬ事実があるということ、荒田別・鹿我別のような日本の将軍の名は事実ではなく、ある家族伝承と言いましょうか、日本の家門伝承に基づくものが無理に挿入されているという史料的研究が多くありますので、やはり神功49年条に基本的に百済の立場が反映されていたとしても、日本での歪曲もかなり混入しているということも考えなければなりません。</p>
<p>盧泰敦</p>	<p>あまり時間もないようですが、私がお二人の発表を聞いて感じたことを付け加えたいと思います。金石文と文献資料の相互関係について、金石文が持つ価値は、文献資料が伝えるある歴史的事項を当代の金石文を通じてどのように更に具体的に理解できるのか、違った理解ができるのか、そのような資料として意味を持つものですが、いま七支刀銘文と神功49年条の記事について、七支刀銘文を理解、銘文を通じて神功49年条やその当時の百済と倭との関係を理解してみようという新たな試みができるのではないかとということで七支刀銘文に注目したわけですが、七支</p>

	<p>刀銘文について議論していくことで今回は逆に、ともすれば七支刀銘文を文献資料、神功49年条をはじめとするそれらの文献資料を通じて七支刀銘文を理解しようという傾向を見せていると思います。</p> <p>ですから初めの意図とは違い、初めは金石文に注目し多くの注意を傾けていたのとは異なり、金石文を通じて文献資料の別の側面を理解しようとする試み、期待とは逆に既存の文献資料を通じて金石文を解釈しようという試みをしていこうという面が少し見受けられますが、何しろ資料が無いですからそれも一つの方法で、文献資料と金石文の統合・理解の側面となるでしょう。ただ、そうやって提示された文章を見ていると、この関係がいつまでも堂々巡りに終始し、新たな突破口というか、新たな進展というのが少し難しくなるような感じを受けます。ですので、今後この七支刀銘文が、当代の一次資料である七支刀銘文に対してもう少し韓日両国の学者らが集中して議論を展開させてみる必要があるのではないかと考えています。</p>
趙法鍾	<p>時間も少し過ぎておりますので、もしご意見がおありでしたら後で少し付け加えることもできると思います。とりあえず4世紀までの古代韓日関係、古代王権の登場と韓日関係における4世紀の問題についてはとりあえずこれくらいで終わらせたいと思います。</p>

(2) 5～6世紀の日韓関係

趙法鍾	<p>はい。では午前中に4世紀まで進めた内容につきまして、午後の会議では5世紀、6世紀以降の金泰植先生、それから森先生に関わるテーマを発表し、討論していきたいと思います。</p>
森公章	<p>ではペーパー〔発表文〕がないのですけれども、口頭で発表させていただきます。</p> <p>古代王権の成長と日韓関係のうち、私は5世紀・6世紀を担当しました。</p> <p>特にこの時代、あるいは今4世紀も含めてかもしれませんが、韓国側の考古学的成果の進展というもの、たとえば全羅南道の前方後円墳の発見など、その加耶諸国でのさまざまな発掘、そして百済の6世紀の王都、公州や扶余の発掘、あるいは最近の弥勒寺や王興寺といった寺院の発掘、こういった新しい史料が加わりまた歴史を別な視点から見ることができるようになったと思います。</p> <p>そして、そのような考古学的な遺物だけではなく出土文字史料、特に百済や、あるいは咸安の城山山城のような、新羅の6世紀の木簡が出たということですね。これは日本では7世紀中ごろ以降の木簡はありますけれども、6世紀という木簡は出ていません。そのような、6世紀に遡り、これは次の坂上先生や盧泰敦先生のところの律令体制といったことに関係しますけれど、ここでも古代王権の確立を考える場合に、その統治制度や、事務組織のようなことを解明できる新しい材料が出てきたということです。</p>

このような考古学的成果の進展の効果というのは非常に大きいと思いますし、これらの新しい成果を今後とも共有して、それに基づいて歴史を考えていくということが一つの課題ではないかと感じました。

そうした新しい考察材料を踏まえて、5、6世紀と言いますと、「任那日本府」というものの問題をどう考えるかということが、やはり一番大きなテーマだと思います。日本でも「任那日本府」があったことなど、あるいは朝鮮半島南部をこの時期大和王権というものが領土的に領有をしていたと考える人はゼロとは言いませんけれども〔研究者の中には〕ほとんどいないというのが、研究の現状だと思います。

その中で、ただ一方では倭人の活動というものが現実にあるわけですから、それをどのように理解するかという問題が、5、6世紀の日韓関係を考える時の大きな論点だと思います。

具体的には倭の五王の称号の問題ですとか、全羅南道の前方後円墳を作った主体、あるいは「任那日本府」といいますか、在安羅諸倭臣ですね。安羅にいたもろもろの倭臣たちの活動の実態はどうなのかということが、それぞれの時代の個別の論点になると思います。

この時に、韓国側の研究では、このような活動を傭兵的あるいは安羅などに隷属した倭人の活動ととらえるという傾向が強いのと思いますが、日本側はやはり倭国側の主体性といったものから考えていくという研究の一つの視点といえますか、それはそれぞれ韓国史、あるいは日本史の側からその活動をどうとらえようかということに多くは起因するのだと思います。

日本側には、倭国側の主体性つまり大和王権の外交方策や日本各地の地域の有力豪族と朝鮮半島の活動、その主体的な活動ということです。そのような目で見ると、細かな部分でまだ解釈が一致しないというところが一つの相違点だと思います。

したがって、そのような新しい考察材料を受けてどう考えるか、さらにそれを受けて今までの文献史料をどのように解釈するかというのは、なかなかすぐには片付かない、あるいは永遠の課題なのかもしれません。しかし、それは一つの、この時期の日韓関係を考える上での、今後の大きな課題だと感じました。

それから、少し先ほども申しました史料の問題として、つまり『日本書紀』の任那問題です。継体紀、欽明紀の辺りは、いわゆる百済系史料というものを一つのベースに外交記事を作っているというところがありますから、そこに描かれたのは百済から見た安羅や新羅に対する観点、あるいはそれに倭がどのようにかかわってくるかという形で史料を読み解いた方が『日本書紀』の正確な理解ができる、というのが近年の文献の読み解き方だと思います。それから一方、『三国史記』の方は、やはり新羅から見て大加耶をどう攻略するかという視点で記述がされていると思われます。

	<p>したがって、どちらの史料に価値があるか、あるいはどちらが間違っているということはないと思いますけれども、それぞれその一面というか、すなわち『日本書紀』だとどちらかというと百済から見た加耶や倭というものが比較的出ののに対して、『三国史記』では新羅から見た加耶というのが出ると思います。ですから、両面をどのように総合的に考え、特に6世紀の加耶を巡る問題の中での各国の関係というものをさらに考えていくということが、やはり今後の課題としてさらに研究をしていかなければならないのではないかと思います。</p>
趙法鍾	<p>はい。すべてを要約するのはちょっと難しいようです。ともかく韓国考古学界の様々な成果により既往の任那日本府説の立場は見直さなければならないということが確認されたという趣旨であったように思います。特にいわゆる韓半島に出撃した任那日本府という説は、今やほとんど0%とは言えないまでも、ほぼ100%近く否定されるという状況にあります。倭人の活動事項についてそれをどう見るのかという観点からいくつかの観点を今後も体系的に検討する必要があるというお話をしてくださいました。特に『三国史記』が新羅の立場から加耶や倭を見たとする、『日本書紀』は百済の立場から加耶と倭を見ていたというかたちの観点や、関心の差異を念頭に置いた研究と言いましょか、そういう認識が必要だという展望を中心にお話いただいたと思います。</p> <p>この議論は金泰植先生が準備した資料の4番から7番まで同様の核心的な内容と繋がっているようですので、金泰植先生の発表をうかがってから、次の議論に進んでいくことにいたします。</p>
金泰植	<p>これまで森先生と私が5、6世紀の韓日関係について共同研究を行ってきました。森先生が日本の学界や我々韓国学界まで含めていくつかの学説を総合し、できる限り合理的に見ようとしていらっしゃるという印象を受けました。</p> <p>にもかかわらず、私が少し残念に思う点は、やはり加耶史に対する認識が少しく不足しているのではないかと、つまり加耶史を中心に据えて見るという視角はまだ無く、主に百済と倭との関係、倭を中心にした百済との関係が中心であり、新羅も少し疎外されているようですし、加耶もほとんど客体としてのみ眺めている、そのような印象を受けました。そのためそういった現状と合わせ、いくつか争点を分けて、だいたい三つ程度に分けてお話ししたいと思います。</p> <p>日本語と韓国語は表現が少し違うからでしょうか、実際におっしゃっていることを聴いて感じるのと、論文でこれまで発表されてきたものから受ける印象が、少し異なるところもあり、それについて明確な見解などを少し伺ってみたいところです。</p> <p>第一に、5世紀の韓日関係における争点は、『宋書』倭国伝にあらわれる倭の五王が七国諸軍事号を自称しますが、その自称号、七国諸軍事号の性格はどういったものかという点です。倭王武が479年に送った上表文を見ると、彼は韓半島南部にある程度の軍事的権利があるということを中国から認められたいと思っていたよう</p>

	<p>に思われます。したがって彼の権利に民政的権利は含まれていないのでこれは支配権とは関わりのないものだとところまでは、森先生と私の理解は一致するようです。一方、森先生は諸軍事号を認められようとするにあたり、倭王にある意図があったということもおっしゃっていますが、ここで最も重要なことはそれが特段実効性を持たなかったという点なのですが、私が「実効性がなかった」と表現してもよいものか、一度森先生に確認をしてみたいと思います。</p> <p>二番目は、先ほども申し上げましたように、5世紀の韓日関係において考古学界で最近新たな問題が提起されましたが、それは全羅南道の栄山江流域で発見された10余基の前方後円墳の問題です。これらの古墳の築造勢力の性格について、在地首長であるとする見解と倭人とする見解に分かれています。これについてこれまでの共同研究で感じたところでは、森先生が前方後円墳の築造勢力を倭人と見ているのだなと思いました。ところが論文を今一度調べ直してみますと、倭人とする見解は、倭人移住民とする見解と倭系の百済官僚と見る2種の見解に分かれ、そのいずれも問題があるとおっしゃって批判なさっています。論文ではさらに在地首長とする見解のほうに一理があるかのように書いてあると、私は理解しました。そこで、在地首長とする見解に賛成なさっているのか、これも一度お尋ねしたいところです。</p> <p>三番目に、いわゆる任那日本府説に関わる6世紀の韓日関係史の争点が、『日本書紀』欽明紀に見える任那日本府というその存在が何なのか、という問いです。このいわゆる任那日本府の性格について、私は大きく任那支配説系統4種類と外交交易説4種類にそれぞれ分けて解説しようと思います。</p> <p>特に、そのいわゆる任那日本府というものに軍事的な性格が無かったと見なし、典型的な任那支配説は認められないとする最近の学界の趨勢は望ましいものと思います。しかしいわゆる任那日本府という用語は、任那つまり加耶に設けられた日本の支配的官庁という感じを与えるため、この用語自体を安羅倭臣館と改めるのがよいのではないかと考えています。これまで私が見てきた史料を整理してみると、この安羅倭臣館の構成員は倭人と倭系加耶人などであり、その存続時期もそれほど長いものではなく、最初は530年代後半に百済によって倭との交易を名目として安羅に設置されたものの、540年代には既にその性格が変化し、加耶連盟の第二勢力であった安羅国が自らの独立性維持を図る目的で運営する外務官署的性格を帯びていたと、私は見えています。もちろん森先生は少し違った見解をお持ちでしょうが、若干の語感の違い程度ではないかと思っておりますが、これについても議論できればと思います。</p>
趙法鍾	〔発表原稿の〕7番目はお読みにならないのですか？
金泰植	後で時間があればやります。
趙法鍾	今、金泰植先生は森先生との研究の過程で少し確認したいという内容を中心に

	<p>三つの大きな質問をなさいました。</p> <p>倭王武が自称した七国諸軍事の性格は実効性の無いものと見るが、これをどうお考えなのかという問題と、その次に栄山江流域で発見された前方後円墳の築造勢力を在地首長と見ておられるのか、倭人系統と見ておられるのか、はっきりと確認しておきたいとおっしゃいました。それから任那日本府を安羅倭臣館と改称することについてどう見られているのか、この三つに要約できると思います。</p> <p>森先生、ご意見をお願いします。</p>
<p>森公章</p>	<p>私の方ではさきほど概括的なことを言ったのですが、大筋のところでは金泰植先生と同じような日韓両国の大体共通した認識もできてきたのですが、細部ではやはりそれぞれの視点から分かれるところがあるというところが、先ほどのご指摘の点だと思います。</p> <p>そのためまずそこに入る前に、最初におっしゃった加耶史に対する理解というのがやはりまだまだ足りないということなのですが、どうしても日本の場合『日本書紀』というものを中心として研究を進めていきますから、そこに描かれたものが、やはり先ほど少しお話ししましたように、百済を中心とするあるいは百済が敵対している新羅や高句麗をどう見て、そして倭もそれをどうするかということが、記述の主体になっています。ですから、なかなか加耶史、加耶諸国の細かい現状というのはわからない。</p> <p>したがって、先ほど少しふれましたように、日本各地に出ている加耶系の土器といったものと、加耶諸国、そして日本諸国、日本の各地域との関係というものがわかれば、やはり加耶と倭との関係というものをまた見据えた新しい研究ができるだろうということで、ぜひそういう研究が進んだらいいと思っております。</p> <p>それで、5世紀の諸軍事号の問題になりますけれども、まずこれはあくまでも軍事権であり、その領土の領有あるいは民政権は一切関係がないということで、日本の学界でも大筋こういう方向で考えていくという意見になっていると思います。</p> <p>しかしながら、その五王の時代を通じて、何度もその地域の軍事権を申請して、そして中国側がそれを認めるということは、全く意味がないのかということになると、日本ではそういうものを日本あるいは倭国側が申請をして中国が認めるということに関しては、何らかの意味合いがあるのではないかとこのところでも考えていこうと。</p> <p>その中でやはり倭の五王、特に倭王武の上表文ですと、百済を助けて高句麗と戦う。そういう中で、七国ですから百済の軍事権も申請をしているわけですが、中国側は、それは当然認めないということになります。それらを申請するところにはやはり半島の南の方との関係を一つのテコにして百済を支援するという方策などがあるのではないかと。</p> <p>それからもう一つ、次の前方後円墳の問題とも関係しますけれども、そこに出てく</p>

る慕韓というものの実態をどう考えるかということで、その地域が、もちろん倭ではないわけですが、百済でもないという独自の地域があり、そこと何らかの実態的な関係があるのではないかとこの視点から日本の側では見ていくということで、そこに何らかの実効性を探る可能性がないかという研究姿勢だと思います。

そこで、前方後円墳の性格が今後さらに研究課題として重要だと思うわけです。

今回の研究を通じて、あるいは金泰植先生も先ほどの4世紀のところでも少しご紹介になりましたけれども、5世紀も含めて、意外に倭と百済との関係というのは結構ぎくしゃくしているというような円滑ではないという側面もあり、仏教や儒教という百済の文化が全面的に入っていくのは5世紀の終わりや6世紀だという感触は非常に強く受けており、そのような5世紀の倭・百済関係というものを、今まで考えていたよりも少し見直す必要があるのではないかと強く感じました。

そのため、やはり倭と百済の間にある栄山江流域の理解というものが重要だと思います。前方後円墳というのは日本、倭独特の墳形、形をしていますから、つまり視覚的なところから倭とのつながりをかなり明示しているわけです。そういうものをなぜ作ったのかということも、その前方後円墳の出現を考える一つの視点だと思います。

その理解に関しては日本でもさまざまな説があり、先ほど申しましたように、まだまだ今後の検討課題だと思いますが、私はこの報告の中ではそのような倭でもないし百済でもないという、いわゆる倭の武の上表文の中で、しいて言えば慕韓という、そのような地域の独立性、あるいはまだ百済には完全に吸収されていないという意味での自立性というものを含めて、この5世紀のこの地域の歴史を考えたほうがいいのではないかと考えています。その意味で前方後円墳を作った主体として、在地首長かあるいはなかなか区別ができないわけですが、在地化した倭人というものを一つの主体として考えられないかと考えております。

ですから、このような百済王権の発展とそれと日韓関係すなわち百済・倭の関係がどうなっていくかという視点から前方後円墳の問題を考えるということも、今後の課題だと思います。

次に6世紀のいわゆる「任那日本府」の実態という問題です。これに関しては、軍事的な性格や、政治機関としての性格というのはほぼ否定されていると思います。

さらに「日本」という言葉は、7世紀末ぐらいにできる言葉ですし、その「府」という言葉は役所や機関を示しますから、どうも当時の実態は反映しておりません。その「安羅倭臣館」という表現に関しては、『日本書紀』に出てくる「在安羅諸倭臣」、私はそういう表現を使っており、「任那日本府」という言葉を使わない方がいいということに関して、金泰植先生と同じような意見だと思います。

また、ここでもやはり韓国史を主体に見るのか、日本史からを主体に見るのかということで、やはり私にはどうしても『日本書紀』を見ると、百済は在安羅諸倭臣とい

	うものと安羅というものを区別して理解していて、在安羅諸倭臣の活動は安羅や加耶諸国の利害と合致するのだけれども、安羅の下にその在安羅諸倭臣が隷属しているというよりはむしろ安羅にいる倭人たちのある程度自立した活動ということとらえるほうがいいのではないかと思います。ですから、これに関してはやはり若干意見が相違していると思います。
趙法鍾	お二人の議論がある程度深まってまいりましたが、お答えをお聞きになりますか。金泰植先生いかがですか。
金泰植	よくわかりました。安羅倭臣館については違和感をお持ちで、安羅には独自の倭人がいたであろうという表現をなさいましたが、私はそう考えられないと思います。とりあえず森先生が現在の史料をもとにそのように認識していらっしゃることは理解しております。 この問題は論文を通じてもう少し真摯に述べなければならないようで、今は時間がありませんので、三つ目の問題についてはこれで終わりにしなければならないようです。二つ目の問題は、在地首長を肯定されつつも在地倭人の可能性もあるということで、やはり[結論は]不明確ですね。
森公章	在地の倭人というか、在地化した倭人ですね。その地域に住んでしまえば、その地域の人と変わらなくなるから、なかなか区別ができない。
金泰植	二つ目の前方後円墳の築造勢力については、二つの学説のいずれにも問題があり、この問題はもう少し証拠の揃うのを待って研究しなければならないと思います。 第一の問題について、少し追加の質問をしたいと思います。結局倭王武の上表文の意図は倭王が百済を支援しつつ高句麗と戦おうというところにあり、その意図のために七国諸軍事号に百済など七国の名が入っているのだとすれば、諸軍事号に百済ではなく高句麗が入っていなければならないと思います。ところが今の状況が反対であるにもかかわらず、倭王が百済を支援して高句麗と戦おうとしてそういった軍事権を要求したと言えるのか、これについて一度お尋ねしたいと思います。
森公章	高句麗の軍事権というのを倭が要求するということはないと思うのですね。高句麗と戦うために、百済から、新羅から、南の朝鮮半島全体と手を組んだ軍事権、その上に立った倭の軍事権がないと。高句麗の軍事権を要求するということはありませんと思うのですね。
金泰植	『日本書紀』にあらわれる5世紀、6世紀前半までの倭軍の活動地域を見ると、実質的に倭軍が新羅地域に行つて軍事活動を行う場合もあれば百済地域で軍事活動を行う場合もあると出てきます。 ただ、実質的には、私が考えるところではその時期の倭軍は加耶地域から技術または技術者を受け入れ、それらの人達の要請によりあちこちの軍隊に加耶人と

	<p>もに派遣され活動するという対価的な活動をしていたという気がいたします。そのような活動を行う地域が南韓地域全域に及んでいたため、むしろそう考えれば諸軍事号に出てくる地域というものがより明確になると思います。</p> <p>したがって、高句麗と戦うというようなことは名分に過ぎず、実質的にはこのような活動に対する追認を受けようという考えだったのではないかと思います。実質的には加耶を通じて百済や新羅の先進文物を取り入れる通路を活用していたでしょうし、高句麗と戦うということは名分に過ぎなかったということです。</p>
森公章	<p>先ほども、5世紀の倭と百済との関係というのは意外に円滑ではないと[申しました]。そして、韓国の研究ではやはり5世紀、特に5世紀の後半、羅済同盟、新羅と百済が提携をして、高句麗を北へこう押しやっていくという視点が中心だと思います。今回5世紀の日韓関係を見ていく中で、やはり倭と百済の関係というのは、5世紀に関して言うと『日本書紀』などに描かれているようではないということです。これらは今後共有していくべき視点だと思いました。</p> <p>また、文化的というか技術的な優秀性と、そして要するに軍事力や政治力の大小は必ずしも対応はしていないか、正比例はしていない可能性もあります。加耶が進んだ文物を持っていたとしても、倭のほうが基盤となる政治勢力や軍事力についていうならばそれを大きくという可能性もありますから、そこは技術力や文化的な先進性というだけでは片付かない問題もあると思います。</p> <p>そして、少し今お話をされていて思いついたのですが、百済や高句麗は基本的に中国に対して自分の領域の軍事号しか申請していないわけですが、倭だけはなぜか逆に言うと韓半島、朝鮮半島南の方の諸地域の軍事権を主張しなければならなかったということも、今はその理由に関し回答は出ませんが、やはり今後検討していくべきではないかと思いました。</p>
趙法鍾	<p>はい、今お二人が集中的に議論され、五王の七国諸軍事号の性格や意味の問題と、その次の栄山江流域の前方後円墳の主体の性格問題、任那日本府を、むしろ「任那日本府」という名称を取り去ってしまう時、むしろ安羅の何らかの倭と関わる性格のものとする、このようなかたちで議論の整理がなされつつも、それぞれの立場は少し違った部分が多く出てきているようです。ともかくこれは継続的に議論すべき課題のようです。各立場の別の先生方からの質問、議論が必要だと思われませんが、時間がほとんど過ぎてしまいました。簡略にご質問をお願いいたします。</p>
濱田耕策	<p>倭の五王の問題ではないのですが、金泰植先生が「任那日本府」という表現は適切ではないので、「安羅倭臣館」と改めたらどうかという提案がありました。森先生、『日本書紀』の記録では「在安羅諸倭臣」ですね。</p>
森公章	ええ、「倭臣」です。
濱田耕策	「倭臣」ですね。「諸」はもろもろという「数多く」の意味ですね。
森公章	ええ、もろもろ。

濱田耕策	<p>考えてみますと、そこで言う倭臣、金泰植先生の倭臣、森先生の倭臣が、倭の臣下だというと、その主人はどこなのでしょう。これは日本の大和王権ということでしょうか。この倭臣。倭人の臣下、倭臣という。その倭臣の主人公は大和王権ですか。そのところを少しお尋ねいたします。</p>
森公章	<p>それでは私の方から先に。</p> <p>これは最初に濱田先生がご質問された、古代国家というのはいつできるのかということのイメージとも関わると思うのです。広く言えば確かに倭王権というか、大和王権というものがあり、それが中国外交においては日本列島を代表しているわけですが、ここで言うこの「在安羅諸倭臣」のところに出てくる「倭臣」たちは、私には少し大和王権のコントロール下というか、その指示を受けて行動しているとは読めません。ですから、むしろ吉備臣といった有力な地方豪族がやはりこの場合だと安羅の地域と関係を持ち、その一つの利権などを守るために安羅と一体となって活動する、そういう側面が強いです。『日本書紀』では一応「倭臣」、広く言えば吉備も大和政権の構成員ですから、そこには入っているのですが、そこはいわゆる後の中央集権的な国家統一とはやはり違った段階というのが5、6世紀にあるのではないかと考えていますので、そこもやはり古代国家の形成時期のイメージということと関係します。</p> <p>したがって倭臣の主人は誰かということ、ちょっと明確なお答えではないのですが、必ずしも大和政権とは言えない。もちろん、これは日本の学界の全体的な意見ということではなくて、あくまでも私の個人的な見方ということです。</p>
金泰植	<p>濱田先生がおっしゃったのは倭臣の主人が大和王朝ではないかという質問でしたが、『日本書紀』にあらわれる在安羅諸倭臣の「倭臣」という用語は百濟側で使用した用語であって、日本側で使用した用語ではありません。日本側ではなく百濟が倭臣と言う時、これは倭王朝、近畿地方の倭王の臣下という意味で「倭臣」とは言いません。百濟人が用いた用語ですので、ただ倭人だ、倭人であり臣下だ、そのようなニュアンスに取りたいと思います。史料上から見ると、安羅倭臣館の倭臣らは大和王朝と利害関係を異にしており、彼らと対立する行為を多く行って、彼らが倭王権すなわち近畿の倭王権の臣下ではないということは明白です。</p> <p>ところで、百濟はこれらの人物の人事権といったものが近畿の倭王権にあるかのごとく、「この人物を送り返せ」、または「ある人に代わる人物を送り返せ」と表現していますが、おそらくそれはあたかも日本全体の代表が近畿の倭王権であるかのように見せかけるという側面で用いられた百濟の外交的戦略であったという気がします。そのため、ここにいくら「倭臣」とあるとは言え、その倭を倭王権と同一視することは、現在の史料からはできません。やはり森先生と同じ見解です。</p>
趙法鍾	<p>私が質問します。少し誤って理解しているのかもわかりませんが、この資料を見ると、安羅倭臣館は530年代後半に百濟により倭との交易を名目として安羅に設置</p>

	されたと、そうすれば主体は百済だと見ていらっしゃるのではないのですか。
盧泰敦	その後が続けて、性格が変化したと…。
趙法鍾	ええ、その後性格が変化しますが、私がよく分からなかったものですから、これをちょっと正確にいただければ、臣の主従的な、こういったものが少し明確になるのではないかと、そう思っています。
金泰植	当時百済が安羅に送った人たちは、やはり百済に派遣され活動していた倭人部隊あるいは倭人官僚であり、そのうちの一部はどこかの地方政権または中央政権から来たのかわかりませんが、使臣のようなものとして来ていた人たちであって、そういった人々を百済が包摂してその地域に派遣し、自らの目的に合わせて活用していたものと考えています。
趙法鍾	百済が主体となるという立場で見ると、それが後に安羅に替わるということですか。
盧泰敦	その意味をいま明らかにするためには、「安羅諸倭臣」という時の「臣」が誰に対する臣と表記されているのか[という問題になりますが、]いま金先生は百済に対する臣と表記されているということですか。
金泰植	倭人であり、官僚であるということです。
盧泰敦	倭人という…。
金泰植	倭人官僚、この程度の意味です。
盧泰敦	では森先生は、この「臣」という言葉は包括的な側面から日本列島に所属する存在だ、日本列島に臣属する存在だ、当時の大和王に象徴される包括的な日本列島勢力に対して臣属しているという臣だ、こういう意味ですか。
濱田耕策	倭人の官僚だと言えば、官僚はある王権に対して「臣」ですから、ではその倭人の官僚を抱える君主といえますか、王権はどこかという問題は、まだ解決されていないですね。
森公章	さきほどの「在安羅諸倭臣」という表現は、金泰植先生もおっしゃったように、『日本書紀』の中では明確に百済系史料、つまり百済の立場から、そこで使われている言葉です。要するに百済から見れば、彼らは彼らを日本列島に帰してくれということを大和王権に言うわけですね。ですから百済の立場から言うと、彼らは大和朝廷に属している人だとは見ているわけです。 ただ、『日本書紀』に描かれた実態を見ていくと、やはり大和朝廷の直接の指示などを受けていなくて、独自に活動しているという面が強いですから、『日本書紀』の用語を使えば「倭臣」ということになってしまうのだけれど、「倭人」と言ったほうがいいのかもしいかなと思います。
金泰植	この問題については白承忠教授が最近、「在安羅諸倭臣」を「倭系安羅官僚」と言おうという主張をなさいましたが、そのような表現も可能ではないかと思います。
濱田耕策	私が最初に述べたかったことは「在安羅倭臣館」あるいは「在安羅諸倭臣」と言うより具体的な表現を、日本の国家ができた後に日本の歴史書を作る時、「在安羅

	諸倭臣」を日本古代国家の歴史像にとり入れ、いわば好意的に拡大解釈すれば、それはすなわち「任那日本府」という、いわば膨らませた、誇張した表現になるであろうと、なったのであろうということを今日のお話の中で思い立ったのです。
森公章	この問題をずっと話していくと果てしがないので、史料の厳密な理解というのは、第3期〔の日韓歴史共同研究委員会〕に送るということではいかがでしょうか。
趙法鍾	はい、今は議論が尽きそうにないように思います。また時間がかなり過ぎておまして、5、6世紀までの議論をとりあえずここで終わらせてはどうかと思います。よろしいでしょうか。では、約15分休憩いたしまして、4時半から始めたいと思います。お疲れさまでした。

古代東アジアの国際秩序の再編と日韓関係

金泰植	では座談会を始めます。第三のテーマは古代東アジア国際秩序の再編と韓日関係として、7、8、9世紀の韓日関係についての問題になります。この問題については今見てみますと、発表文が坂上先生のものが非常に長く、盧泰敦先生のものが少しと短いようです。今回は盧泰敦先生からまずご発表ください。
盧泰敦	<p>7、8世紀の韓日関係史について私はいくつかの主題に分けて接近を試みました。主に既存の研究において、特に日本で刊行された概説書など、そのようなものに見える視角について、私から見ると少し充分でない、明らかでないと考えられる主題を選んで検討しました。</p> <p>まずは7世紀中盤までの双方の接触の中で、663年に白江口の戦いが展開することに関する叙述です。百濟復興戦争と白江口の戦いについての理解、この戦いの様相と性格についての把握において、主に唐軍と倭軍の対決という視角から整理することにより、新羅軍の役割に対する理解が甚だ不足していると思われます。このような新羅軍に対する、新羅軍の役割に対する理解の不足は、これに続く時期の新羅と日本との間の関係に対する理解にも反映されていると思います。</p> <p>その次の主題は、8世紀中盤における新羅と日本との間の外交的摩擦と断交に連なる状況に対する理解についてです。</p> <p>これは新羅と唐との間で繰り上げられた戦争という、その戦争と戦争の状況のなかでなされた新羅と日本との交渉において、両国の立場に対するより明確な理解なくして、8世紀中盤に起こった新羅と日本との間の外交摩擦と断交を理解することはできないと考えます。</p> <p>663年から668年に新羅と日本との間で国交が再開されて以降、両国間では非常に緊密な、外交的に緊密な関係を維持していました。しかし表面的には緊密な、友好的な関係にあったにも拘らず、その裏ではお互いに対する認識における</p>

根本的な相違点を孕んでいたのです。そのような状況に対する認識の乖離は、結局渤海の登場という新たな情勢、唐と新羅、唐と日本との間の交渉が再開されるとい、そのような国際情勢の変化によって摩擦をひき起こさざるを得ませんでした。

そのような面について深く理解することで、7世紀中盤に繰り広げられた、表面上提起された両国間の摩擦の本質的側面を、より深く理解することができるのではないかと思います。それを集約いたしまして、私は「隣国」と「蕃国」という、互いの相手方に対する理解が相異なった、理解の「同床異夢」が、結局は破綻を招来した原因であると考えています。

このような側面について見てきまして、つづいて両国間の文化交流の側面として、仏教文化を通じての両国間交流、また律令文化を通じての両国間交流について順に見てみました。特に仏教文化の場合、日本に現在伝わる新羅人や百済人の仏教叙述に注目することは、両国の仏教の相互交流の様相など、またさらに東アジア仏教圏文化のなかでの両国間の仏教交流の状況、また両国の仏教文化の同質性と差異性を理解する上で役立つものと思われま。今後もこのような方面に対する研究が更に深まっていくことを期待しています。

あわせて、律令と律令体制についての理解においても、韓日双方で確認される資料をさらに検討し、相互間の律令文化の交流の側面に対する理解の深化を図る必要があると思います。この部分も、大きくは東アジア諸国家間における律令文化の交流という側面から比較検討の必要があります。

このような側面について、その間私が調べたことを通じて見てみますと、日本側の研究と言いましようか、叙述には、多分に、ともすれば律令など、または東アジアにおける新羅の位相についての評価、こういった部分では新羅を他者化し、新羅を日本より下位にあるそういった実体として認識し、それを通じて古代日本の相対的優越性を確固たるものにしようという認識が少なからず見受けられます。このような側面は、近代史学のある時期に日本の史学において強調していた重要な特性のうちの一つではないかと思います。

今後は、このように古代韓国と日本の相互間で相手を他者化し、自らのアイデンティティを強調しようとする立場を脱し、東アジア地域歴史圏という側面からより相互の同質性と差異性に対して認識を図っていくという方向に向かっていかなければならないのではないかと考えています。

古代韓日関係史に対する理解の深まりは、究極的には両国国民の間の相互理解増進にその目的があります。そのような面から両地域の国家間の関係も重要ですが、それとともに両地域の住民間の交流により注目していく必要があります。そのためには両国が中央集権的国家体制を確立させてから、そのような観念に立脚してそれ以前の時期を理解し整理した資料、そして近代初期の国民国家定立の際に提起され通用していた歴史認識から少し離れ、両地域の住民間の交流の側

	面を重視する必要があるということになると思います。以上です。
金泰植	<p>全般的に7、8、9世紀の韓日関係において新羅が疎外され、あるいはなおざりにされているという問題を述べられました。</p> <p>この問題については、7世紀は森先生そして8、9世紀は坂上先生が担当されましたので、森先生のほうから発表をお願いします。</p>
森公章	<p>わたしはこの中で7世紀を担当しました。7世紀に関しては、やはり今までの4、5、6世紀とは大きく違うところは、国際秩序の再編ということがテーマに挙げられていますように、隋や唐など、中国に強大な国家が現れた時に東アジア地域の国際関係というのはどうなっていくのか、その中で日韓関係の変化というものを考えていくということが、それ以前とは違った課題になると思います。</p> <p>そこでは、日本側には古代国家の成立時期ということに関しては、3・5・7論争、つまり3世紀の邪馬台国の段階で古代国家はできていたと見るのか、5世紀の巨大な前方古墳が造られる段階で古代国家はできたと見るのか、そして7世紀の中央集権的な律令国家ができていく過程の中に古代国家の成立を見るのかといった論争があります。</p> <p>やはり、考古学者は最初の二つの考え方ですね。文献を中心として研究している人はやはり律令国家というものが古代国家の一つの完成的な形ではないかという視点で研究をしていると思います。</p> <p>ただ、前方後円墳体制を言い出した都出比呂志さんなども、6世紀というのが一つの国家を考える分かれ目になるのではないかというようなこともおっしゃっていますから、先ほどの6世紀の問題を7世紀とどう結びつけるかということも研究課題だろうと思います。</p> <p>そして、その中でとにかく7世紀には古代国家はできるということになりますから、そこでは朝鮮半島のほうでは統一新羅というものが半島全体を統一し、一方日本列島のほうでは倭から日本へ国号を変更して律令国家というものができていく。その中で今までとは異なる国家と国家との関係というものがより全面に出てくるというつながりになると思います。ですから、そのような6世紀までの日韓関係のとらえ方、そして7世紀以降のとらえ方、これをどういう視点で見っていくかということ、その過程をどういうふうにとらえるかということが、ここでの論点になるかと思っています。</p> <p>そして、白村江の戦いの時の新羅に対する評価というのがあまりなされていないのではないかというお話もありましたが、そこは7世紀のところで、古代国家というものができ、明確な国境線が明らかになってくるという中で、それ以前は日本の古代国家形成の中に、朝鮮半島の歴史というものも非常に密接にかかわっているという視点があるわけですが、それ以降は、全く別々の国だという意識があり、そこは新羅の歴史であって日本の歴史ではないというところもあり、やはり7世紀以降の新羅が疎外されているというわけではないと思うのです。6世紀までの日韓関係のとらえ方</p>

	<p>とは、新羅の位置付けというのが少し変わってくるというところが、先ほど盧泰敦先生のおっしゃったような感想につながるのではないかと思います。</p>
<p>盧泰敦</p>	<p>それについて、白江口の戦いをひとつのポイントと捉えて話ができるわけですが、基本的に森先生は、7世紀後半に入り日本における律令国家の成立が、その前の時期とは異なり国境の観念と国家間の関係を明確に線引きして認識され、それが結果として新羅に対する低評価、あるいは新羅に対し白江口の戦いと同じようにその役割をなおざりに見るようになった背景である、このようにおっしゃっているわけです。日本史的観点で見ればそういった視角が出てくることは十分に考えられると思います。さらにそれに加え、そのような7世紀末以降に日本で成立する史料の解釈に対し、近代の日本史学における倭についての何らかの歴史認識もまた作用しているという点は無視できません。したがって、新羅を、または近代朝鮮を他者として相対化、他者化することで日本の優越性を確認しようという、そういった認識が作用した点、また、もう一つの律令国家・律令文化についての理解にあたって三国、新羅・百濟・高句麗の律令文化についての理解が、近代史学において、近代日本史学において相対的に低評価ないし十分な認識が為されなかったために、そういった側面が更に強化されたのではないかと、そう考えております。</p> <p>ですからもう一言だけ補充しますと、具体的な実証的側面から、先ほど申しました通り百濟復興戦争における実質的な主力は新羅軍であったという側面、次に律令文化に関しましては新羅では6世紀代に、百濟でも6世紀代に入りますと律令に関する具体的資料が現在確保されています。もう一度言いますが、「律令体制」と、あえて「体制」という語を付さなくとも、中央集権的な国家体制の樹立に必要な法律体制としての律令は、6世紀代に入ると新羅と百濟で既に施行されており、それが具体的な地方支配においては被征服地に対する支配方式・統治方式としての地方制度の成立という形で現出した、さらには新羅の律令の起源を遡ってみますと、結局それは高句麗に連なるものと見なければならぬでしょう。ですから律令文化の起源を新羅は新羅、或いは百濟は百濟だけで完結するのではなく、高句麗に繋がっており、高句麗からさらに北中国に連なり、それがさらに日本へ、新羅を通じてか百濟を通じてか高句麗を通じてか、ともかく日本へその影響が及ぶ、こういった東アジア全体の律令文化の拡散過程と関連づけて把握してみてもどうかという考えを持っています。</p> <p>結局私が申し上げたいのは、韓日関係史に対する認識の土台において、理解の基本的土台において、しばしば相手国を自国と比較し、自国の優越性ないし自国の歴史の独自性を認識・理解する一つの方法として、相手の国の歴史を他者化する、そのような近代初期に見られた歴史認識の影響から脱しなければならないのではないか、脱するための具体的方法は何なのかということをとともに努力して模索していくべきであると、そういう考えです。</p>

金泰植	この問題について森先生のほうからもう少しお願いします。
森公章	<p>白村江戦に関してはやはり、白村江の戦いについては日本側では意識が集中するけれども、周留城の攻防など陸上のほうは確かにあまり研究がなされていない、ということは今後もっと研究していくべき点だと思います。</p> <p>それからやはり『日本書紀』は新羅を敵国視するなど、服属視するという一つの史観で書かれていますから、そういう辺りの次の8世紀のやはり対外意識みたいなものですね。そういうものをまたさらに解明していく中で、新羅に対する見方というものですかね。それを今後また深めていくことが必要だと思います。</p> <p>そして、律令制のことは次の坂上先生の議論のほうに委ねたいと思います。</p> <p>その7世紀の終わり、最近日本でも7世紀の木簡がいくつか見つかると、その中に新羅的な表記や、新羅的な制度を反映したものがあり、やはり7世紀の末の新羅からの影響やあるいは風俗・習慣を中国化するという段階で、その新羅のやり方をまねくという点は指摘されてきていると思いますから、そういう点をまた新たに見つけ出して、新羅との関係をさらに多面的に研究することも今後の課題だと思います。</p>
金泰植	これについての盧泰敦先生のお答えは飛ばしまして、坂上先生の発表を聴こうと思います。これはちょっと長いのでもう少し短くお願いします。
坂上康俊	<p>いや、読めばそんなに長くはないと思います。このまま読みます。ほとんど。あまり長くはありませんので。</p> <p>出土文字史料による新羅・百濟古代史の具体的な肉付け、あるいは深化・発展、研究は興味深いものがありました。盧泰敦先生の報告です。</p> <p>新羅のいわゆる律令制については、新羅も唐や日本と同様の体系的法典を作ったかどうかの証明が難しく、作ったという立場もありうる一方で、個別条文ないし条文群をその都度命令として出していった結果として、ある点では唐や日本の制度に近くなったという立場まで、さまざまに取りうるだろうと思います。</p> <p>新羅の律令に関しては、個別の条文が明らかでない日本の近江令や浄御原令と同様の方法上の問題を抱えており、存否については早急には解決できないだろうと思います。</p> <p>こうした中であって、個別の制度について出土文字史料が今後果たす役割が大きくなるだろうことが、百濟木簡の出土によって実感されたと言えます。</p> <p>このような事例が積み重ねられれば、新羅・百濟の律令制の具体相が明らかになり、日本の律令制の特徴もつかみやすくなると思います。</p> <p>一方、日韓の間の交渉史の研究において、重点の置き所に違いがあることも実感されました。たとえば、4～6世紀の倭の五王や、任那日本府、広開土王碑などに関する研究は、韓国では現在でも盛んなようではありますが、日本ではこういうことをしている研究者はその後「若手には」専門にはもはやほとんどいないというふう</p>

に追加します。日本での通説が大きく変わる予感がないことが主因ではないかと思
います。

これに対して奈良時代よりもむしろ平安時代に入ってから日本と新羅・高麗と
の関係史は、日本では最近非常に盛んであります。また、渤海との交渉史も日本
ではロシア領まで視野に入れて、依然として盛んであります。

これに対して韓国では、少なくとも今回の共同研究より受ける印象では、この分
野はかなり低調に見受けられました。まだ張宝高などの英雄重視にとどまっている
のではないかと危惧しております。

特に韓国の韓日交流史の研究史は、直接それを語る史料が韓国側にある場合
の交渉史に限られており、交渉がない、あるいは希薄、あるいは韓国側に史料が
ない時期に関しては薄いのではないかと思います。

基本的に日本の歴史そのものには関心がないことが背景にあるように思いま
す。もう少し突っ込んだ体制比較論がないと、新羅の律令制についての議論も水
掛け論に終わり、研究が発展しないことを恐れます。

ここで言う研究の発展とは、仮にあったとして新羅の律令制を、韓国史の中で
どう位置づけるかという問題。そして日本の同様の問題に取り組めるかどうかが主
要な論点になるべきだということであり、高麗の武人政権、日本の平氏政権後の両
国のたどる道筋まで見据えた議論が必要だと言いたいのであります。

大きくは封建制の存否、時代区分論につなげる議論ができるかどうかということ
であり、ぜひそういった観点から、次は新羅史ではなくて韓日関係史を見ていただ
きたいと思います。

そうなると必要なのは、交渉史よりはむしろ比較史ということになるように思いま
す。日韓関係史研究は交渉史で満たされるわけではないと思います。どこで、どう
して、こういう交渉史になったのかという原因論を近現代まで視野に入れて議論す
る際には、どこが違うのか、どこでなぜ違ったのかということを詰めて考えていく必
要があるように思います。

たとえば、8世紀なら8世紀の、国家による人々の把握ということは、村落文書な
どを用いて文献学のほうでもある程度は比較が可能です。

しかし日本では8世紀の宮都、国衙、郡家のみならず、集落や水田、畑などの生
産手段の発掘調査も盛んに行われているのに、韓国では先史時代より後の集落
の様子がさっぱりわかりません。

もしこれが立地に起因し、原因があり、日本の集落が散村であったり計画村落が
多かったのに対して、韓国では今に続くような邑的な集村が統一新羅時代でも同
じなのであったら(山城の多さなどからもおおよそはこのように推測できると思いま
すけれども)、律令制施行の意義や、律令制導入の際の社会の状況は、日本と新
羅で全く異なっていたのではないかという推測も可能ではないかと思えます。

	<p>たまたま今は今回出土文字史料と集落を取り上げましたが、これらは共に考古学に期待される分野とも言えます。今後は文献学と相補いながら、考古学の日韓共同研究がいわゆる考古学者同士の研究交流ではなく、また古墳時代までに限られることなく、また宝捜しの観点にとどまることなく、文献学と突き合わせながら交流を重ねていく必要があるのではないかと思います。</p> <p>最後の段落は、反省というのはまた別に設けられるようですので、今は省きます。</p>
金泰植	<p>坂上先生は韓日関係史に関する韓国側の資料が日本に比べて非常に少ないということについて述べられましたが、坂上先生のご意見に対して盧泰敦先生からお答えいただきたい。</p>
盧泰敦	<p>坂上先生のご意見に、また提案に対し、大部分が同感です。具体的に、今後はこの共同研究における比較史学的研究の必要性を提示されました。そのために双方の社会制度など生活様相、また全体的な体制について相互比較などを行わなければならないのご意見に全体的に同意します。</p> <p>政治的な側面における国家間の交渉史的側面をこえ、両国の、両地域の住民と彼らの暮らしを規定していた様々な制度の相互比較を通じて、両国の歴史進展における同質的側面と違いを把握する必要があるというお言葉についても、全くの同感です。</p> <p>考古学的側面、考古学の分野も研究に合流させ、出土遺物を通じて又は遺跡の比較研究を通じてもう少し具体的な歴史像を持ちつつ、比較史学的議論を進めていく必要があると考えます。その点も同感です。このような研究を進めていき、究極的には東アジア地域史としての何らかの歴史体系を構築すること、これが果たして可能なのかについての模索をともにやってみる、そういった努力が要望されていると思います。以上です。</p>
金泰植	<p>以前この問題について発表された際は、律令問題があった、なかったという論争が少しあったようで、ここで少し律令体制における違いを明らかにする必要がありそうなのですが、どうでしょうか。</p>
坂上康俊	<p>相違があるということをお互い認識して、それを少しでも縮めていけばいいと思います。史料的には、たとえば先ほどわたしの報告では出しませんでした。最近仏教の経典の中に角筆です。新羅では少なくとも使われていた。どこから来たか系統はよくわかりません。何と言いますかね。お経に竹べらみたいな、物はわかりませんが、それで振り仮名というのを振ったりするのです。日本に残っている経典、それが新羅語なのですね。</p> <p>だからそういうのは確実に新羅から持ってこられた。そしてそれをまねてというか、それに学んで日本の訓読の方法等を日本で編み出していくという、そういうことも最近では盛んに研究として行われて、結局その史料、そういう意味で、出土文字史</p>

	<p>料だけではなく、現在の文献史料の中にもそういう新羅的なものというのが、あるいは新羅のものが発見されるという状況でありますので、史料的にこれからまた増えていく。あるいは方法を開発していくということで、その議論の幅といのを少し狭めていくということができると思います。</p>
金泰植	<p>違いについて全く出てきませんが。</p>
坂上康俊	<p>それでは、先ほどの盧泰敦先生の8世紀以降についての見解についてのわたしの感想というのを言ってもよろしいですか。</p> <p>そのように日本の大化の改新を明治維新のように考え、あるいは律令を明治時代の憲法のように考えて、日本はアジアで最初に憲法を作ったという、その誇りを律令にまで投影して、新羅より進んでいるなどと評価をしてきたというのは、確かにそういう研究史があります。</p> <p>ただ、そういう場合に、律令制とは何かという概念規定そのものが日本で必ずしもかっちりとされているわけではないようにも思います。</p> <p>そういう意味で新羅史を私のように日本の律令制をやっている研究者から見ると、非常に面白い対象に思われました。</p> <p>むしろ新羅でも体系的律令法典が作られたのだと主張することで、同じ土俵でどちらが先かということを争うような、それこそ何か、何と言いますか、その研究史に対する反省を欠いているようにも思います。</p> <p>そして、8世紀以降の新羅について、日本での研究があまり盛んでない原因は、唐と比較して、やはり遣唐使というのは非常に派手だということもありますが、唐の場合には史料が膨大にある。そして文献史料だけではなく、トルファン文書や敦煌文書など、そういう律令を実際に施行している文書がある。日本でも『続日本紀』とか、あるいは律令、それから正倉院文書等の文献史料がたくさんあり、かなり精度の高い、あるいは実態に近づいた議論ができるのに対して、やはりそこは新羅が史料的に非常に厳しいというところが、その研究がやりにくい。かえって日本と唐との比較はやりやすいけれども、日本と新羅との比較などができにくかったという理由で、これはある意味では仕方がないけれども、先ほどから申しましたように、新しい方法なり史料の増加を待って埋めていくしかないと思っております。</p>
金泰植	<p>坂上先生が問題点を指摘されつつ、新羅の史料が不足していることによる論点を指摘なさいましたが、[盧泰敦先生は]これについてどうお考えですか。</p>
盧泰敦	<p>坂上先生のご意見は、今後どのように研究を、韓日関係史研究を進めていくべきかという方向についておっしゃっていると思います。最近韓国で活発な関心を集める分野のひとつが文字の伝来と使用というテーマです。つまり漢字がどのように、どのようなかたちで使用されていたのかという部分で、そのような議論のなかから一つ例を挙げますと「之」という文字があります。「之」はここ[韓半島]では文章の終結字として用いられて来ました。高句麗や新羅、百済においてこの「之」字が文章</p>

	<p>の終結字として使用されたのですが、日本の木簡やその他の記録にも「之」字が文章の終結字として使用されていることが確認されています。ですから、これは新羅を通じて日本に伝わったものではないか、こういったことがありまして、そのような面から漢字の受容において、韓国と日本の古代国家における漢字受容における同一の現状に注目していました。</p> <p>ところが、この「之」字が文章の終結字に用いられることは中国でも確認されています。確認されたという研究が発表されました。もう一度言いますと、韓国と日本での漢字の使用における独特の何らかの一形式であると主張してきましたが、実は中国でもそういった用例があったということになり、したがってこれをどのように理解すべきかといった疑問が提起されたのです。</p> <p>しかし「之」字に対する中国での多様な用例のうち、文章の終結字として用いられたケースを特別に古代韓国や日本で取り入れて使用・定着させたということは、由来が中国にあるとはいえ、それは古代韓国と日本独自の独特な漢字使用法であると言えると思います。そのため、文化要素の起源としての側面からだけでなく、それが使用され定着していく過程での特性を検討し理解することが重要であるということを、このようなケースから確認できると思います。</p> <p>したがって、今後韓日間の、または韓国と日本の歴史のいくつかの側面を比較・研究するにあたり、東アジア全体の中に韓国と日本の歴史を配置し把握する、そういった努力を通じてより良い結果を得られるのではないかと考えています。</p>
金泰植	<p>この問題についての議論は似たような論調で展開しますので、日本側の先生方のうちどなたかお一人お話しいただいて終わりたいと思います。</p>
濱田耕策	<p>森先生も追加があればお願いしたいのですが、坂上先生から律令制の比較史的な研究が大事だというお話がありまして、交渉史から比較史へ進むという日韓の共同研究は必要だと思います。律令に関して言えば、先ほど盧泰敦先生が漢字の使用法の新羅・日本との比較の話がありましたが、これはいずれも中国の文化、広い意味で大きな文化、根本的な文化を新羅・日本がどのようなスタイルで取り入れたかと、その取り入れ方の同一と差異点ということの指摘だと思います。</p> <p>渤海は高句麗を半分以上は継承している。この渤海においては、その中国文化、制度をどのように取り入れているのかという比較の研究ももう一つの要素として、新羅・日本・渤海との比較を組み立てることは、また中国文化を受容する別の形がそこに見えてくるのではなかろうかと思います。</p> <p>盧泰敦先生の言われる「東アジア」とは、広い意味で、その中に渤海は入るでしょう。</p>
趙法鍾	<p>韓国史の議論の中で東アジア史の大枠の話を扱えれば当然ずっと発展的な話が出てくる、と言うお考えであれば同意します。</p>
金泰植	<p>では、濱田先生の発展的提案を最後にして、第三のテーマについての座談会</p>

	をこれにて終了します。 では最後に拍手で終わらしましょう。
--	----------------------------------

※日本語版座談会記録はテープ起こし原稿をリライトしたものである。